

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1985年

ポーランド月報

1/2月号

(通巻34/35号)

500円

Szczęśliwego Nowego Roku
A Happy New Year
1985



ポビエウシコ事件その後
 ヤルゼルスキ將軍への公開状…………… 3
 E・リビンスキ
 「連帯」活動家と顧問の声明…………… 4
 旧KORメンバーの声明…………… 5
 チェコスロヴァキア 憲章77の声明…………… 6
 反暴力市民委員会(ワルシャワ)結成宣言 7
 恩赦後——指導者は語る
 私は公然と活動するつもりだ…………… 8
 Z・ロマシェフスキ
 責任はわれわれ皆にある……………10
 ワルシャワ「連帯」地下委員会

「空飛ぶ大学」を語る(インタビュー)……………12
 W・バルトシェフスキ
 ソ連の軍事介入は可能か 匿名筆者……………20
 過去を向いた予言者たちの集い…………… 26
 ——第13回ポーランド歴史大衆会談聴記
 伊東孝之
 新語法の手引き — 支配者用語の基礎知識
 2 (く～しんぼ)……………30
 「連帯」運動の原点にむかって……………32
 加藤一夫
 作ってみませんか ポーランド料理……………34
 ポーランド日誌……………2・35

ポーランド日誌
 1984年10月5日～31日

11月2日 チェコの「憲章77」がポビエウシコ神父事件に関し声明を発表(本誌6頁)。党機関紙『トリブナ・ルドゥ』、「L O」が13日から開催の理事会でポーランド問題特別報告書(本誌84年8/9月号に要旨)を採択すればポーランドはL Oを脱退すると報じる。
 11月3日 ワルシャワのスタニスワフ教会でポビエウシコ神父の葬儀。ワレサ委員長が弔辞を述べる。葬儀後、群衆がデモ。警察が待機したが衝突はなし。「連帯」幹部18名が治安機関のテロに関し声明を発表(本誌5頁)。英国のリフキンド外務次官ポーランドに到着。戒厳令以来初の英国閣僚のポーランド公式訪問。
 11月5日 旧KORメンバー16名がポビエウシコ事件に関し声明を発表(本誌5頁)。KOR創立者のひとりである経済学者E・リビンスキがヤルゼルスキ將軍あて公開書簡を出す(本誌3頁)。
 11月6日 キンチャク内相、この2年間に犯罪行為や職権濫用で2464人の警官、保安部隊員がクビになったことを明かす。
 11月7日 リフキンド英次官、ポーランド政府関係者との会談を終え帰国。同次官は滞在中「連帯」活動家、顧問、司教会議副書記らとも会談し、ポビエウシコ神父の冥福を祈って教会に献花した。西ドイツ連邦議会社民党代表团が3日間の予定でポーランド訪問。
 11月9日 ワレサ委員長とW・フラシュニク(「連帯」下シロンスク地区指導者)、国会と閣僚会議あての手紙で「ポビエウシコ事件は現行法が警察の専横を許し

ていることを示す顕著な例」と述べる。ヤルゼルスキ首相、ハンガリーを日帰り訪問しカダル第一書記と会談。ポーランド党内強硬派一掃の支持を求めた公算が大きい。帰途チェコスロヴァキアに立ち寄り、スロヴァキア共産党指導者とも会談。西独への亡命を求める東独市民グループがワルシャワの西独大使館に押しかける。ピトムの炭鉱事故で坑夫7名が死亡、15名が負傷。新労組の週刊機関紙『組合員』創刊。

11月10日 「連帯」活動家M・ギルらを含むクラクフ市民22名が、暴力から人権を守る市民運動の組織を宣言するアピールを出す。『トリブナ・ルドゥ』はリフキンド英次官のポーランド訪問について「訪問の成果は認めるが、彼の行動や発言のいくつかは対ポーランド内政干渉である」と書く。

11月11日 第1次大戦後のポーランド独立回復の66周年記念日。ワルシャワの聖ヤン教会での記念ミサの後、4000～1万人とみられる群衆が花輪を捧げに無名戦士の墓までデモ。ZOMO(警察機動隊)による封鎖で少人数しか墓に近付けなかったが、衝突はなかった。クラクフ、グダンスクでもデモ。

11月12日 ワルシャワで14名からなる「反暴力市民委員会」(KOPP)設立(本誌7頁)。

11月13日 ポーランドのマスコミ、グダンスクのヤンコフスキ神父を「西独の報復主義者に買入れし、グダンスクのドイツへの返還を望んでいる」と非難。

11月14日 ワルシャワ、ヴロツワフ、クラクフのKOPPメンバーが当局から警告を受ける。『トリブナ・ルドゥ』は、旧KOR、独立ポーランド連盟(K.P.N)「連帯」内過激派などの活動再開の阻止を呼びかける。

[35頁に続く]

ポピエウシコ事件——その後

【編集部注】 イエジ・ポピエウシコ神父の誘拐殺害事件はポーランド社会内外に大きな衝撃を与えた。政府当局は事件の徹底的説明を約束したが、11月5日、内務省高官A・ピエトルシカ大佐の起訴以降、捜査の新たな展開は報じられていない。「連帯」関係者の間では公表された以上に奥深い背景があるという見方が有力であり、直接の下手人ではないにせよ、ヤルゼルスキ首相の責任を問う声が強い。その代表的なものとして、ポーランド経済学界の大御所で旧KORの創設メンバーとしても名高い老エドヴァルト・リピンスキの胸に衣を着せぬ明快なヤルゼルスキ弾劾の公開書簡を紹介する。リピンスキは1981年9月、「連帯」全国大会の席上で自らも創設者の1人であったKORの解散声明を読みあげ、満場の拍手喝采を浴びた〔本誌第8号、1982年10月31日、参照〕。あわせて「連帯」の主要活動家および顧問たちによる11月3日付の声明、そして旧KORメンバーによる11月5日付の声明を紹介する。事件に対する反響はポーランド国内にとどまらない。西側諸国の労働組合および国際的労働組合組織からも多数の抗議声明や追悼声明が発表されている。また東側諸国でも人権運動や反体制知識人の間に大きな衝撃が走り、勇気ある発言を生み出している。本号では、この間ポーランド人民にとりわけ深い共感と連帯の意を表明してきたチェコスロヴァキアの憲章77の声明を紹介する。

ヤルゼルスキ将軍への公開状 エドヴァルト・リピンスキ

List Otwarty E. Lipińskiego do Generała Jaruzelskiego

将軍殿！

イエジ・ポピエウシコ神父は公安職員によって殺害された。これがはじめてのテロルというわけではない。警察はグジェゴシユ・プシェミクを殺害し、軍隊は沿岸地方の労働者たちとヴェク炭坑の労働者たちに向かって発砲した。警察署で、監獄で、人々は拷問され殺されている。この殺人の責任は将軍の政府に、将軍自身にある。それが全国民の確信である。

それぞれの社会には差異があり、そのなかにもさまざまな利害が存在する。社会は一枚岩ではないし、そうあってはならない。社会は徒党ではない。言葉をかえれば、社会は本来、多元的性格を持つ。多元主義は社会が正常に発展するための前提であり、自由な社会の本質、前提である。自由

な世の中にあってはさまざまな利害、価値観、世界観が共生し、おたがいに影響を及ぼし合っただ話しながら多様性の共同体をつくりあげる。多元主義はたんに自由の前提ではなく、社会が豊かになるための条件であり源泉であり、経済的・社会的・文化的・政治的に社会が広く発展してゆくための前提でもある。それなのに、将軍、あなたには「いかなる多元主義も許さない」と叫ばれた。

将軍は全体主義的共産主義の信徒である。あなたたちは共産党を、歴史によって永遠の支配を託された社会的グループであると見る。あなたたちの言う社会秩序とは、3つの原則、すなわち、暴力、うそ、奴隷化への信奉に基礎を置いたものである。この世界観には民主主義のための場所はな

い。いわゆる社会主義的民主主義とは、ありてい
に言えば、奴隷化である。この奇妙な民主主義の
変種のきわだった特徴は、民主主義制度の最も重
要な特性、つまり、自由選挙の欠如である。いわゆ
る人民の代表とは人民によって選ばれたわけでは
なく、党機関の決定により投げ与えられたもので
ある。民主主義とは多数による統治をいう。現存
社会主義は党独裁による統治である。独立自治労
組「連帯」に組織された労働界がみずからの権利
を要求しはじめた時、現存社会主義の防衛に立ち
あがったのは軍と公安機関であった。国民を相手
にした12月戦争は、すべての世界観、思想、感情
を権力機関に従属させることが目的だった。ふた
たび強圧に支えられた全体主義の委任統治がはじ
まった。それは司法の独立を侵し、監獄とテロル、



一九八二年、ワルシャワ地区「連帯」會館に
際ヒサをあげたボビエウシコ神父

国民すべてにさるぐつわをはめる検閲を用いなが
ら、あらたに全体主義的秩序を導入しようとする。
将軍閣下、あなたの世界観を認めない者、モラル
と多元主義を社会の進歩の前提であると考える者
たち、あなたにはかれらが政敵であるばかりか、
そのような人間は粉砕してしかるべき、ひいては
殺してしかるべき不倶戴天の敵としか見えないの
か。将軍閣下、あなたはよくごぞんじだ、こうし
た精神のなかで育つのは軍、警察、S B [公安警
察] ばかりであることを。われわれはあの S B 将
校がほかの 2 人の将校にイェジ・ボビエウシコ神
父殺害を依頼したのだと聞いた。これこそ、憎し
みと残忍性の雰囲気につつまれて育つた S B の、
身の毛もよだつあかしであろう。なにびとも殺人
者に生まれついているわけではない。公安機関の
あの殺人者たちもまた、残忍性を学び、教えられ、
慣れさせられた長い訓練期間のうちにそうならざる
をえなかったのだろう。しかし、こうした不吉
な教育過程を支配した者たちはその責任をとらね
ばならない。

将軍閣下、われわれは、ボビエウシコ神父殺害
を命令したのがあなたではないことを信じたい。
だがあなたはこの殺人の責任を引き受けるべきだ。
身を守るすべのないカトリック司祭の虐殺に対す
る責任はあなたの良心にある。私はここではっきり
と言うべき義務を感じる——この殺人は、ポー
ランド国民に対して権力を執行するうえでの道義
的根柢の残滓をあなたから奪い去ったのだ。道義
的根柢を剝奪された権力はまったく非合法の権力

であり、不法な権力強奪であり、国民の道義的成
長にとって危険な権力である。今こそあなたはそ
の地位から去るべき時だ。われわれはポーランド
に秩序があることを望む、われわれはポーランド
に対話と協働があることを望む。われわれは暴力
とうそに支えられた秩序は望まない。ゆえにわれ
われは公共生活における凶悪犯罪からみずからを
守らねばならない。われわれはみずからの身をみ
ずから守るであろう。地下に追いやられた「連帯」、
いつわりのない世論が、テロルと虐殺を終わらせ
るためのすべてを教えてくれるであろう。

1984年11月5日 ワルシャワ

「連帯」活動家と顧問の声明

Oświadczenie z 3 XI

イェジ・ボビエウシコ神父の苦悶の死は、ポー
ランド社会を弾圧するポーランド人民共和国政府
の一機関によるテロルの道にしろされた一連の足
あとのひとつである。直接に手を下した内務省職
員 3 人に死刑判決がくだされたところでテロルを
防止することはできまい。1980年11月、マゾフシ
エ地方の各職場、なかでも、イェジ神父が司祭を
務めていたワルシャワ製鉄所はとりわけ強く、内
務省が社会の監督のもとに身をおき、政治的テロ

ル——徒党によるテロル（1970年、1976年）も個人によるテロルも——に責任ある人間に対する処置を行うよう要求した。1981年12月13日以来、テロルの数は何倍にも増加した。テロルを効果的に防止する方法、それは弾圧機関に対する社会の監督そのものである。

われわれは、イエジ神父の墓標とすべての「連帯」組合員、そしてポーランドの社会全体に呼びかける。ポーランド人民共和国の法に基づくすべての政府機関にたいして、政治的テロルを排し、全内務省機関を社会の監督のもとに置くよう不断の圧力をかけよう。

1984年11月3日 ワルシャワ

アンジェイ・グヴィアズダ、セヴェリン・ヤヴォルスキ、マリアン・ユルチク、イエジ・クロピヴニツキ、ヴィトルド・クルル（全国委員会委員、ラドムのヴァルテル将軍記念コンビナート労働者）、ヤツェク・クーロン、アダム・ミフニク、カロル・モゼレフスキ、ヤヌシュ・オニシュキェヴィチ、グジェゴシュ・バルカ、ヤヌシュ・パウビツキ、アントニ・ビェトキェヴィチ（全国委員会委員、カリシュの労働者）、ズビグニェフ・ロマシェフスキ、アンジェイ・ロスプウォホフスキ、ヤン・ルレフスキ、アンジェイ・スウォヴィイク、ヘンリク・ヴェツ。

旧KORメンバーの声明

Oświadczenie z 5 XI

イエジ・ポビエウシコ神父はもういない。

この凶悪犯罪の以前にも、神父には、マスメディアにより、政府スポークスマンにより中傷の攻撃がしかけられていた。

これらの迫害が、犯された事件の土壌となり雰囲気となった。

イエジ・ポビエウシコ神父殺害に関する国営通信PAPの公式論評が10月21日付日刊紙に掲載されるやいなや、著名な「連帯」活動家（セヴェリン・ヤヴォルスキ、ヤツェク・クーロン、ヘンリク・ヴェツ、ズビグニェフ・ロマシェフスキ、ヤヌシュ・オニシュキェヴィチ）に対して、悲劇を悪用する「挑発の名人」という非難が現われた。政府スポークスマンのイエジ・ウルバンはすぐにアンジェイ・グヴィアズダを非難し、KORの名をあげた。

われわれは、〔当局にとって〕脅威と感じられる特定の個人に対する憎しみを煽り立てる動きに警告を発する。

さまざまな刊行物がこのことを証明している。当局はこの悲劇とその原因とから教訓を引き出そうとせずに特定個人の脅威の煽動や社会的緊張、不安をいっそう強めている。

1984年11月5日 ワルシャワ

アンジェイ・ツェリンスキ、イエジ・フィツォフスキ、ヴィェスワフ・ケンチク、ヤン・キエラノフスキ、アンカ・コヴァルスカ、エドヴァルト・リピンスキ、ヤン・ユゼフ・リプスキ、アダム・ミフニク、エヴァ・ミレヴィチ、ハリナ・ミコワイスカ、ヴォイチェフ・オニシュキェヴィチ、アントニ・バイダク、ユゼフ・リビツキ、アヌェラ・スタインベルゴヴァ、マリア・ヴォシェク、神父ヤン・ジエヤ。

〔以上 Biuletyn Informacyjny, No. 100, 14.11.84, より 訳：篠崎 誠〕



花の十字架——勝利はわれらに

チェコスロヴァキア 憲章77の声明

Charter 77 Statement on Father Popiełuszko, Prague, 2 Nov. 1984
Uncensored Poland News Bulletin, No. 22/84, 15 Nov. 1984

カトリックの神父、イエジ・ポピエウシコの誘拐と殺害の報をわれわれは怒りと嫌悪の気持で受けとった。われわれはあらゆるテロを断罪する。それは激高した憎悪の行為であり、あらゆる権利とあらゆる道徳的原則の否定であり、無実の犠牲者の死体の山の陰に自ら自身の卑劣さを隠すものである。このような犯罪が、古くからの文化的伝統によって緊密に結ばれ、政治的制度と運命を同じくするわれわれの隣国で犯されたとすれば、われわれはとうてい黙っているわけにはいかない。しかもこの犯罪が、教区の信者たちにとつてのみならずワルシャワのストライキ労働者にとつても尊敬すべき司祭であった人物に対して、そして自由と正義と社会的連帯についてわれわれときわめて近い考えを持つ人物に対して犯されたとすればなおさらのことである。イエジ・ポピエウシコの死は偶然ではない。彼はその信念と、この信念のゆえのその不屈の立場の殉教者となったのだ。

この犯罪の実行容疑者が逮捕され、当局者が犯人の厳正な処罰と事件全体の徹底した調査を約束していることは、おそらく肯定的な兆候であろう。しかしながらわれわれは自身の経験を通じて知りすぎるほどよく知っているのだ。わが同盟諸国の権力機関は、法の支配の全般的な無視によってそのかされることがなくても、またはるかに強力

な勢力によって支持されることがなくても、テロリスト活動——とりわけ秘密警察の構成員によって実行されるそれ——は生じうると考える傾向にあることを。それゆえに、将来に対して一定の保証を与えうる公正かつ誠実な調査は、より広い背景の公然かつ断固とした断罪を避けてはならない。これにはこれまで未解決の類似の事件の究明が含まれるべきである。

敵意は普通きわめて積極的な意志を生み出す。だからわれわれは、ポピエウシコ神父の虐殺がポーランド・カトリック教会の精神的確信と道義的權威を強め、「連帯」支持者たちと社会的解放の運動に一層の力を与えて挑発と疲弊に対する彼らの抵抗を強め、敵対者に対して国民的和解と民族的隷従の境界線を認識させるものと確信する。

われわれのうちの信者たちは降臨節第1日曜日にポピエウシコ神父と全ポーランド国民のための祈りを捧げるつもりである。

1984年11月2日

ヴァツラフ・ベンダ

ヤナ・ステルノーヴァ

イジ・ルムル

ヴァツラフ・マルイ

〔訳：水谷 駿〕



Ks. JERZY POPIELUSZKO
PATRON Solidarności
zamordowany w dn. 19-X-1984r.
przez oficerów M.S.W. P.R.L. CZŁONKÓW P.Z.P.R.
„OJCEZKO NA... A DZIS BRATA ZABIJA BRAT...”

イエジ・ポピエウシコ神父
「連帯」の後援者
ポーランド人民兵団内務監員、ポーランド統一労働者党（PZPR）の
下統一労働者党（PZPR）の
一九四四年十月二十一日誕生
「福間」……今日、兄弟が死後級して「
(註)とまかれた(註)

反暴力市民委員会(ワルシャワ) 結成宣言

the Declaration of Warsaw KOPP, 12 Nov. 1984

Uncensored Poland News Bulletin, No. 22/84, 15 Nov. 1984

【編集部注】ポピエウシコ神父誘拐殺害事件に衝撃を受けたポーランド社会は同種事件の再発防止に立ち上がろうとしている。その試みのひとつとして10月31日にヴロツワフで労働者、知識人により人権監視委員会が設立され、その後ワルシャワ、クラクフ、グダンスク、ウッチ、ポズナンその他主要都市で同種組織の結成が相次いでいる。これに対し政府は強硬な警告を発し、弾圧を辞さない構えである。以下ワルシャワの反暴力市民委員会の結成声明を紹介する。〔訳：水谷 駿〕

——イェジ・ポピエウシコ神父の治安警察将校による虐殺に衝撃を受け、

——警察の捜査を免かれて犯人がいまだ不明のままの農民活動家ピオトル・バルトシチエの等しく悲劇的な死を想起し、

——地下紙では報じられているものの公式報道では一切報じられず、あるいはせいぜい申し訳け程度に報じられただけの多数の他の虐殺、襲撃、誘拐事件を想起し、

——わが国における山賊的行為に対し公然たる法的制裁を求める多数の呼びかけに同調して、

ここに反暴力市民委員会(KOPP)の設立を宣言する。

社会は全面的真実を知る権利を持つ。われわれはこの真実に仕えようとする。社会は恐怖に対して自衛し、政治的蛮行に対し自らを組織する権利をもつ。われわれはこの自衛と自己組織化に役立つとうとする。これは連帯の1形態である。さらに社会は、ポピエウシコ神父の虐殺の、世論には知らされていないこれほど有名ではない人の虐殺の、背景と動機のすべてを解明する義務を負う。われわれは、たとえ部分的にせよ、この義務を遂行したいと思う。

ポピエウシコ神父が虐殺された今、われわれはグジェゴシ・ブシェミクとピオトル・バルトシチ

エの死の原因の最調査がぜひとも必要であると考える。類似の暴力行為について、また氏名不詳者ないし治安機関員による暴力行為の脅しについて、善意あるすべての人々がわれわれに情報を提供するよう要請する。善意あるすべての人々がわれわれを支持し、この支持を可能と考えられるあらゆる手段によって具体的に表現するよう呼びかける。われわれが尽力しようとする問題に対し積極的な関心を示し、必要とあればわれわれ自身に対し関心と保護をさしのべるよう訴える。われわれの行動を暴力と報復によって阻止しようとするあらゆる試みは、山賊行為が政府上層部内に、とりわけ治安機構内部にその保護者を有していることの、したがって政府の意図はわが国における法と秩序の回復にあるとする政府の保証が危険なうそであることの、否定すべからざる証拠となる。

だがわれわれは、国民全体を襲った深い道徳的衝撃の結果、警察のテロに終止符を打つとする政府の宣言が、今度こそは本物であることを期待している。

1984年11月12日

反暴力市民委員会(KOPP)

バルバラ・グロフスカ(歴史家)
マチエイ・ヤンコフスキ(溶接工)
セヴェリン・ヤヴォルスキ(製鉄工)
アンカ・コヴァルスカ(作家)
スタニスワフ・クルコフスキ(法律家)
アナトル・レヴィナ(コンピューター学者)
エドヴァルト・リピンスキ(経済学者)
ヤン・ユゼフ・リブスキ(文芸批評家)
ヤヌシ・オニシケヴィチ(数学者)
イェジ・ブチャタ(画家)
レフ・ソコウォフスキ(製鉄工)
アニェラ・スタインベルゴヴァ(法律家)
マリアン・クフィアク(農民)

恩赦その後——指導者は語る

After Amnesty——Leaders Speak Out

【編集部注】 本号では、7月恩赦で釈放された指導者の1人、ズビグニェフ・ロマシェフスキのインタビューと、今なお地下で不屈の闘いを続けるZ・ブヤクら「連帯」マゾフシェ（ワルシャワを中心とした一帯）地方執行委員会指導部の声明を紹介する。

ズビグニェフ・ロマシェフスキは1940年生れの物理学者、創設以来のKORメンバーの1人で、調査委員会の責任者として人権侵害に関する情報の収集、整理、公表にあたった。

「連帯」結成後、マゾフシェ地方幹部、全国委員会委員に。戒厳令施行と同時に地下に潜り、地下放送ラジオ「連帯」を組織する。82年8月31日に逮捕され、83年2月懲役4年半の刑に。本年7月の恩赦で釈放。「連帯」合法期を総括した論文「1980年8月～1981年12月：次は何か」が「ポーランド不屈の「連帯」」（柘植書房）で紹介されている。

「連帯」マゾフシェ地方執行委員会の論文は直接にはポリエウシコ事件に関連して執筆されたが、ここで展開されている主張は現情勢下における「連帯」運動のあり方の基本に関わっている。職場活動の強化を強調したZ・ブヤクの本年8月30日のラジオ「連帯」演説（本誌12月号掲載）とあわせ読むとき、運動の現状に対する地下指導者たちのいら立ちが感じられる。なおZ・ブヤクとW・クレルスキのインタビュー「大衆的、日常的な社会の抵抗を」（本誌第3号、1982年5月）、Z・ヤナス「『連帯』全活動家諸君へ」（第2号、82年3月）、W・クレルスキ「第3の道」（同第4号、82年6月）などを参照。Z・ブヤクの論文、インタビューは、ほかに本誌第4号、12号（83年2月）、16号（同7月）にある。

私は公然と活動するつもりだ

インタビュー ズビグニェフ・ロマシェフスキ

Zamierzam działać jawnie: rozmowa ze Zbigniewem Romaszewskim
“Solidarność” Biuletyn Informacyjny No.101, 28. XI.1984, Paris

【地下紙『週刊マゾフシェ』102号（1984年10月18日付）に掲載されたインタビュー。聞き手は同紙編集部である】

獄中の人に対する新たな救援方法を

問 恩赦決定より前、あなたを含め獄中の「連帯」および社会自衛委員会KORの幹部11人は、「今後2年半活動をしなければ釈放してやる」との当局の誘いを拒否した。恩赦で釈放された今、11人および他の「連帯」指導者の役割についてどう思うか。

答 自分自身のことが一番話しやすい。私はかつてKORや「連帯」マゾフシェ地区本部救援局〔弾

圧された人々のために当局とかけあう部局。ロマシェフスキはずっとその活動の担当だった〕にいた時と同じことをしようと思っている。何よりも、〔地下で秘密裡にでなく〕公然と活動し、合法性の問題や人権擁護活動に専念したい。11人についていえば、常に連絡を取り合い様々な見解を協議するのが適当と思う。しかしそれをやりとげる十分なエネルギーを必ずしも皆が持っているのではないかと恐れている。

問 恩赦が適用されず獄中に残された人々を守るためにどんな方法があると思うか？

答 最初に私がひどく心配なことについて話そう。逮捕や弾圧が激化すると、反対派の出版物は受難の記事でいっぱいになる。これは、世論喚起が連

捕、投獄、殴打などの被害者の援護手段だったKOR時代からの伝統だ。しかし弾圧がきわめて大規模だと弾圧に関する出版物は電話帳のようになり、読む方が受けつけなくなって援護の役を果たさなくなる。弾圧された人々の援護のための新たな方法を考え出すことはわれわれの重要課題だ。現在ポーランドの政治囚は数十人なので個々の政治囚に対し世論の喚起という古典的方法で援護できるが、これがもし数百人ともなれば、別の方法が必要だ。私が主に考えているのは、逮捕された人の周辺、つまり勤務先の工場や居住する地域などでの活動の組織化だ。もしそうした場でビラやポスターや請願その他の運動が行われ、逮捕された人の状態について人々が詳しく知るようになれば、地域の人々から家族に支援の手が差し延べられようし、工場内では釈放を求める圧力が高まるだろう。

問 しかし、ボグダン・リスとピョートル・ミェジュフスキ〔恩赦を適用されなかった地下活動の中心メンバー〕の援護は、地域レベルの問題ではない。

答 リスとミェジュフスキについては私は楽観視している。私の意見では、あれは当局にとって一種の取引材料で、いずれ検察官が「2名は刑法122条〔西側と結託しての国家反逆罪〕違反ではなく128条〔国家転覆準備罪〕違反だから恩赦されよう」と言うだろう。彼らの裁判はわれわれ11人のと同様に政府にとって不都合で、開廷不可能なものなのだ。むしろ現体制の中では何でも起こり得るし、たとえ裁判になったとしても別段驚くにはあたらない。しかし私個人は当局が現段階で裁判にふみきるとは考えられない。〔AFP時事電によればリスとミェジュフスキは12月8日に釈放された。〕

彼ら2人ほど有名でない他の政治囚たちの問題の方がはるかに困難だ。たとえばカトヴィツェ製鉄所労働者（複数）の例だが、組合の印刷機を隠匿したとして経済犯に問われ、投獄された。ばかげたことだ。だが、この場合は少なくとも事実関係が明白なので組合内世論や国際世論に訴えることができる。さらにひどいのはルビンの鉱夫たちやカロス巡査部長殺害犯たちだ。刑務所内で彼らを見かけたが、どこにでもいるような17〜18歳の若者だった。

問 もし、もう少し典型的な弾圧パターンで、も



Z・ロマジンスキ

シグロジスコ〔町の名〕で彼らが孤立していなかったなら、警官を殺したりせずびらまきや壁にスローガンを書くなどの行動ができただろう。

答 たしかにひとりの人間が殺されたのは悲劇だ。だが、あの若者たちの生命もそれぞれ貴重であり、人道的見地から守ってやらねばならない。彼らひとりひとり人間として世論に訴えることが必要だ。彼らがどんな人物か、事件の詳細はどうだったか、捜査はどのように行われたか。ルビンの鉱夫もカロス巡査部長殺害犯たちも、尋問の際に殴られ、供述を強制された。〔恩赦〕獄中にいる人数が減った現在こそ、彼らひとりひとりを人間として世論に訴え、彼らを守ることができる。

弾圧の合法化に注意

問 ポーランドにおけるものごとの合法性についてどう思うか。

答 かなりパラドックス的な事態だと思う。ギエレク時代と比べ、一面では体制による抑圧は相当強まっているのだが、もう一面では言いようによっては合法性も高くなったと言える。これは、当局がそれまで非合法だった自らのおこないを、法にかなうものとして認めたためだ。1982〜83年、市民権の制限に関する膨大な数の法律が国会で可決された。そのため、集会・結社の権利を実際上禁ずる特別法規定、個人の人格の不可侵性や家庭内の平安の尊重をおびやかす内務省に関する法、「連帯」時代の基本的成果をなきものにする検閲法改訂、今のところはまだ適用されずにいるがわれわれの上に鞭のようににらみをきかせている「寄生虫法」などが出来あがった。ほかにも国外追放令や刑法改訂（略式手続の拡大、弁護の権利の制限など）が計画にのぼっている。

心配なのは、こうしたすべてに対し世論が實質的に反対の声を上げないことだ。見方によっては、自ら制定した法の10分の1も利用していない現在の政府は非常にリベラルで、そのおかげで人々は幸せなのだと言えるかもしれない。しかしそれらの法が十分に適用された状態を想像すると、この国にいったい何が起るのか、と背筋が寒くなる。いま現在立法の面で起きていることは極めて危険であり、社会はもっと注意を払って変化とその方向に対して大きく警鐘を鳴らさねばならない。

供述は拒否せよ

問 あなたは獄中の人や弾圧された人の救援活動に長く携り、経験も豊富だが、その立場から何か助言を。

答 ラコヴィエツカ刑務所で私を担当した尋問官の言葉が、ずいぶん私に考えさせてくれた。いつだったか、取り調べに対して私が例によって「返事を拒否する」と繰り返した後、彼が尋ねた。「どう思う？ なぜ皆はわれわれにいろいろと話すのかね」。これは実際面白い問題だった。取調べは暴力的なこともしばしばあり、殴打もあるが、そういう強制的供述は尋問された人々の率直な供述に比べればほんの一部にすぎない。取調べで人々が話す主な理由は精神的なものだと思う。第1に、本当のところは敵でないように見え、礼儀作法もわきまえた相手を前にして、沈黙を続けるのは難しい。ただの世間話なら、強情に黙っている理由

もない——その考えから会話が始まり、しだいに話題は安全無害でなくなっていく。そうなればもう自白の入口に立ったも同然だ。第2の理由は、尋問官から何らかの情報を聞き出したいという気持だ。捕った方は完全に孤立して拘留され、自分自身の状態についても仲間についても何ひとつわからない。尋問官の質問のひとつひとつ、言葉のはしばしから何かつかめるかもしれない——と思って尋問官をあざむきながら会話を続けようと試みる。そして結局は供述をはじめてしまう。そのうえ、世間が警察で吐いてしまった人間に対して限りなく寛大なことも供述を助けている。

精神面のほかに、別の、おそらく最も重要な面もある。つまり、尋問官が知っていることと立証できることとの間の根本的相違について、人々はわかっている。ある出来事について尋問官が大体のところ正しい描写をしてみせるのを聞いて、「全部知られているのではないかと」パニックをおこして自白してしまう者がいる。これ以上ばかげた話はない。取調べ官が計略に使うデータは立証不可能な情報源、たとえば密告等から得たものであることが多く、調べられている人の将来には何の重要な影響も及ぼさない。ところが自白すればそれが裏付けられ、裁判で意味を持ってしまふかもしれないのだ。だから、黙っていなければならない。返事を拒否すれば彼らはその問題についての追求をあきらめざるをえないか、もしくは計略の手の内を露呈するか、そんなところだろうから。

[訳：高橋初子]

責任はわれわれ皆にある

ワルシャワ「連帯」地下委員会

nous sommes tous coupables, Z. Bujak et al.

"Solidarność" Bulletin d'Information No.101, 28.11.84

事態はいつものように起こった。ある日、金で雇われた殺し屋が、今度の場合はワルシャワで雇われた治安警察の将校が、最高の人物を、知的な聖職者、情熱的なキリスト者、真の愛国者、正義と勇気と純粋の人、自らの道を進んだ人をポーランドから奪い去った。

今日、すべての者が白問しなければならぬ。誰のせい？ 事件の責任は誰にあるのか？ 治

安警察の山賊どもとその上司のみに責任を帰するのは独善というべきである。もちろん、彼らは絶対に辱めを免れないし、国民の目に情状酌量の余地は一切ない。だが、ポビエウシコ神父の殉教に直面してわれわれははっきり言わなければならない、責任はわれわれ皆にある、と。

そうなのだ、われわれ「連帯」の活動家は、この類い稀な人物、わが友人を悪者の攻撃から守る

ことができなかったのだ。暗殺者の手がイエジ師の生命を狙っていたことを、多くの証拠があったにもかかわらず、われわれは十分声高にかつ強力で叫びたてなかつた。治安警察のテロ行為を多少ともぼくろしまひさせざる態勢をわれわれは準備してこなかつた。

そうなのだ、われわれワルシャワの工場労働者は、われらが司祭の死を防がなかつたのだ。そうなのだ、われわれワルシャワの知識人はイエジ師を守らなかつたのだ。われわれを支え、われわれに希望を抱かせるために決して時間を惜しまなかつたあの師を。この苦い真実は誰にもいささかも変えられない。悪名高い山賊どもの行動を前にしてのわれわれの受動性は誰も免罪できない。そこからわれわれは必要な結論を引き出さず、テロに対する戦線を組織しなかつた。まさにこの責任を、教会当局を含むポーランドの最高権威とともに、われわれも分かち持たねばならない。

以上に劣らずはっきりと言っておかねばならない。師に対する憎悪のキャンペーンがそれ相応の抵抗を受けていたならば、おそらく暗殺者は殺害をためらつたであろう。先立つテロ行為のすべてがそれにふさわしい対応を受けていたならば、人殺しどもはおそらく勇気をなくしたはずだ。

経験が彼らに処罰されないという安心感を与えたのだ。すでに久しい以前から、役人どもは「叛逆者」とされた市民に対し犯された暴力行為を問われなくなっている。バルト海沿岸労働者に発砲した者も、ラドムで「健康の小道」〔警棒を構えて2列に並んだ警官の間を通して乱打する〕を

組織した者も、さらにはヴエク鋳の坑夫に銃撃を加えた者も、すべて処罰を免れた。治安警察の者はすべて、殴るも撃つも自由であることを経験から知ってそうしたのである。彼らは大胆になり、裁判所がこうした行動を奨励して一層大胆になった。ここで想起しておくべきは、最近、グジェシ・ブシェミクの殺害者を釈放した判事の手もまたポビエウシコ神父の血で汚れていることである。これは暴力とうそに加担したものが支払わなければならない代償である。

繰り返す言う。治安警察の役人は追及を免れると確信している。いかなる宣言も無益であり、今日、その最高幹部が何びきの贖罪のヤギを差し出そうと、事態は一切変化しない。無法と山賊行為に対するわれわれの執拗な日常的な抵抗のみが何ごとかを変化させられる。力のあるかぎり抵抗を続けよう。もう一度怠慢の責任が問われることのないようにしたい。あらゆる山賊行為を白日の下にさらさなければならない。いかなる術策も弄することなく、必要なあらゆる力をふりしぼって兄弟たちを守らなければならない。現在のポーランドにおいて、法の支配を実現させ、治安警察機関を社会的統制に服させること以上に重要な問題はない。

コンラド・ビェリンスキ
ズビグニェフ・ブヤク
ズビグニェフ・ヤナス
ヴィクトル・クレルスキ

〔訳：水谷 駿〕



「空飛ぶ大学」を語る

ヴワディスワフ・バルトシェフスキ (インタビュー)

The Society for Academic Courses: An Interview with Władysław Bartoszewski
Studium Papers, vol.8 No.3, July 1984, Ann Arbor, Mi., U.S.A.

【編集部より】 1978年から「連帯」時期にかけ、ポーランドのいくつかの都市で活動した自主教育運動「学術講座協会」、いわゆる「空飛ぶ大学」について、その創設者のひとりヴワディスワフ・バルトシェフスキが語ったインタビューを掲載する。このインタビューは1984年3月にバルトシェフスキが米国アン・アーバー市を訪問した際、ポーランド問題専門の英語季刊誌「Studium Papers」編集部がおこなったものである。なお、訳出にあたり一部省略した。

—あなたは1978年1月に創設された学術講座協会 (TKN) の創立者のひとりですね。TKNが誰のイニシアティブで、またどのような状況の下で生まれたのか話して下さい。

TKN創設の第1段階は、TKNの名前も正式な構造もまだない時に始まった講義シリーズだ。企画の発足は1977-78年度の新学期 (77年9月) 頃、ワルシャワのある住居で講義シリーズが始まったのは11月だった。政治経済史、近現代ポーランド思想史、ポーランドの政治思想、歴史学的・社会学的・経済学的観点からみたポーランドの社会伝統、などがテーマだった。

講義シリーズが始まった時私はアメリカ滞在中だったため、この最初の段階には参加していないしこの目で見てもない。第1回目のシリーズではタデウシュ・コヴァリク (経済学者)、アダム・ミフニク (歴史学者)、ボフダン・ツィヴィンスキ (歴史学者・社会学者・文芸批評家)、トマシュ・ブレク (文芸批評家)、アンジェイ・ティシュカ

(社会学者)が講義した。このシリーズは通称「空飛ぶ大学」と呼ばれたが、それは19世紀から20世紀初めの第1次大戦前までワルシャワにあった同名の秘密自己教育・啓蒙運動の伝統にちなんでのことだ。当時 [ポーランドは三国分割下にあり]、ツァーリのロシアによってポーランドの歴史、文学その他ポーランドの文化的、民族的、社会的伝統に関する一切が教えることを禁じられていた。「空飛ぶ」という名のころは、常に会合の場所を変えつづけることでツァーリの手先の目をくらすという意味だった [下欄参照]。

当時はまだTKNとして結集していなかったこの講義シリーズの発起人たちの中には、主としてワルシャワの様々な思想的背景を代表する学者・知識人がいた。いかなる左翼政党にも属していないが白らを社会主義者と呼ぶ人々があり、カトリック信者、カトリック活動家があり、強いマルクス主義的背景を持つ者もいた。非常に多様な人間の集まりだったわけだ。さらに世代的にも30代か

訳者より Latający Uniwersytet, 英語でいえばFlying University は日本では各所で「飛ぶ大学」「空飛ぶ大学」と訳されているためここでもその例にならった。しかし、このFlyingは、「空を飛ぶ」意よりはむしろFlying Dutchman (ポーランド語ではlatający Holender) を連想させる。Flying Dutchman すなわち「さまよえるオランダ船、さまよえるオラ

ランダ人」とは、喜望峯付近に荒天時に出沒したと伝えられるオランダの幽霊船またはその船長 (最後の審判の日まで航行し続ける運命にあるとされた) のことで、ワーグナーの歌劇にもなっている。毎回ところを変えて開かれる講義にさまよえる幽霊船のイメージを重ねた、含蓄のある名前である。

ら50代まで色々だった。彼らは皆、行動の必要性を感じていた点で結びついていた。

質問の後半つまり状況に関しては、もっと詳細な答えができる。ポーランドの情勢全体がT K N創設の背景をなしていた。ここで忘れてならないのは、自由の拡大を求める民主主義的でリベラルな動きが1975年以来ポーランドに明白に現われていたことだ。

この機にポーランド人の間で非常に論議をまきおこした問題、つまりヘルシンキ協定〔1975年7月ヘルシンキで開かれた東西ヨーロッパ安全保障会議の諸協定〕について指摘したいと思う。知られているように、多くのポーランド人が、ヘルシンキ協定はヨーロッパの〔東西〕分割と現状を確認した、という見方をした。しかし幾人かのポーランド知識人は、ヘルシンキ協定に盛り込まれて国際的に認められた規範の忠実な実施を要求すべきだと提案した。その意味は、もしもヘルシンキ協定のいわゆる“第3バスケット条項”（人権に関する包括的条項）の枠内で自由の領域を広げることが可能ならば、ポーランド人はその条項の履行をねばり強く、平和的に、力行使するのではなく社会的圧力を利用することで追求すべきだということだった。そして言論の自由を拡大し、検閲を制限し、独立した文学書や学術書を書き、印刷・発行する試みが行われた。これがやがて、宗教の自由、思想・見解の自由をはじめ、自由に移動する権利——すなわち外国旅行の自由——といった様々な人間的自由へ拡大することが期待された。

今日ではヘルシンキ協定といわれるポーランドの反対派運動との間にはほとんどつながりがない。とりわけ国外に住むポーランド人にとってはそうだが、しかし、ヘルシンキ協定はあのころ非常に重要性を持っていた。ヘルシンキ会議の数か月後の1975年末、ポーランドで最初の抗議の波のひとつ、59人の知識人の手紙〔政府の憲法改訂提案に対する知識人の抗議〕が発表されたのは決して偶然ではない。1975～76年にかけての冬、憲法改訂に抗議するいくつかの公開書簡や多くの手紙が国会も含めポーランド当局あてに送られたのも決して偶然ではない。憲法改訂案はポーランドの政治体制をさらに共産党の教義に従わせ、ポーランド人民共和国をソビエト・ブロックにより強く結びつけるものだった。たとえ形式上の改訂にせよ、ポー

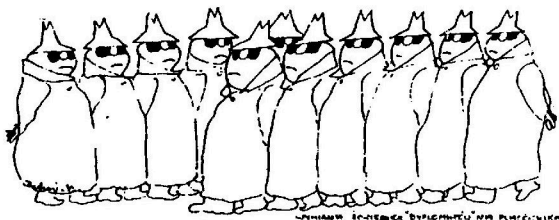
ランド人は社会の希求を無視した勝手な上意下達の改訂に対し、手を結びあって反対した。この反対運動は何よりも、ポーランド政府の代表がヘルシンキで署名して認めた人間の諸権利に基づくものだった。ヘルシンキ協定はT K N創設の重要な要素のひとつだったのだ。

T K N創設のもうひとつの要素は、1977年に自衛および反対運動が存在し、活動していたことだ。まず、1976年6月のラドム、ウルスス事件後、弾圧された労働者との社会的連帯をうたって労働者防衛委員会（KOR）が生まれた。他の学生、知識人、労働者グループも各地で同様の活動を始めた。数か月後、人権市民権擁護運動（ROPCiO）が設立された。KORと時を同じくしてルブリンの若いカトリック知識人が『スボトカニア〔出会い〕』という名称で活動と出版を始めた。『出会い』という名は人々の間の出会いと対話をとりもちたいとの願いを表わしていた。ここで言っているのはもちろん違ふ見解の人同士の出会いや対話のことだ、同意見ならわざわざ対話する必要はないから。それは、共通の目標をめざしながらそれぞれ違った達成手段を考えていた人々同士の出会いだった。彼らの究極目標は疑いなく自由な国の中で人権が完全に尊重されることだったが、当面は可能な枠内で自由を拡大するために闘っていた。

『出会い』、KOR、ROPCiOと並んで、というよりもむしろそれらと協力して、1976年から77年にかけて独立出版運動も発展した。私がそれを“秘密出版”とは言わず“独立出版”と呼ぶのは、この出版物の多くが（すべてではないが）著者の名を明示していたからだ。出版者たちの名も特定はさほど難しくなかったし、彼らの所在は（特に警察には）周知の事実だった。

とまあこれが自己教育運動の形成に先立つ状況だ。この状況を知らないと、どれほど急速に講師も参加者も粒ぞろいの多数の講義シリーズ開催が盛んになりワルシャワから他の都市へも広がっていったかを理解するのはむづかしからう。

——T K Nの目標は何だったのですか。政治的・イデオロギー的理由で教育システムがゆがめられ制限されていることへの対抗が第1の目標だっ



たのか、それとも学問が高度に専門化されていく一般的傾向への対抗の意味もあったのか……。

現実的課題は、小学校から大学に至る教育の、特に世界観形成の分野で広く見られる誤りを正すことだった。特定の歴史的事実や、特定の亡命ポーランド人文学者の名前や作品が教えられていないことから生じた歴史教育、文学教育のギャップを埋める必要があった。哲学と社会学の分野でも、世界の研究の動向、最近の業績、どんな新理論が展開されているかなどを広く伝える必要があった。もちろん、西側諸国ほどではないがポーランドでも学問の専門細分化傾向があったのは事実だ。バイオロジーとテクノロジーの分野では高度な専門分化がポーランドにおいてもみられたし、他の学問分野でもある程度そうだった。だがその事実だけでは、個人の住居での講義を発足させる危険をおかす動機にはならない。自由で正常な状況下であれば、各地の大学や高校に色々なコースや公開講座をもうけて人々の多面的発展をはかることもできるだろう。自分の専門分野とは別に天文学や物理学や地質学、地理、文学、旅行、外国語などに興味を持ち、それらの知識を容易に習得できる人間はどここの国にもいるものだ。

TKN創設の中心的理由は、東欧の政治システムが社会科学、人文科学そして人々の精神、見解、個性を形づくるすべてのことを取りしきろうとした結果生じたギャップを埋めるためだった。

ひとつの例が、1914年のポーランド独立をめざす闘いと民族国境を作ろうとする闘いについての無視と歪曲だ。第1次大戦の際にウィルソン大統領が掲げた14カ条のひとつに、海への出口を有する独立した自由なポーランドの回復があった。しかしウィルソンの提案はポーランド国境も明確化せず、国家として存在するための要件も規定して

いなかった。第1次大戦終結後〔独立を回復した〕ポーランドはすぐさま、圧倒的な優越を誇るソビエト・ロシア軍から自国を守るという問題に直面した。ソビエト軍はヨーロッパを征服し赤色化する第一歩としてヴィスワ川〔ポーランドを流れる川〕にまで到達していた。この赤軍をヴィスワ川でくいとめた1920年8月のワルシャワ攻防戦は、英国の作家ダバードン卿により世界史上18番目に決定的な戦いとされている。もし赤軍の進攻が続いていたならおそらくドイツが革命化し、他のヨーロッパ諸国でも革命が起きていただろう。それほどこの戦いは重大な出来事だった。当時のポーランド人の姿勢——人民党指導者ヴァイツェンティ・ヴィトス率いる民族統一政府と、エゼフ・ピウスツキの軍事指導力を持して結集した学生、農民、労働者ら志願兵——はポーランド人すべての一体感の現われであった。ポーランドの独立とヨーロッパの自由を守るためのこれほどの国民的団結は、その後は1939年まで見られなかったと言えよう。だが現在ポーランドの公教育はこれらの出来事をまったく歪曲して教えたり無視したりしているのだ。

もうひとつの歴史ねじまげの例は、第2次大戦前史についてだ。ヒトラーとスターリンの協定は中・東欧を分割しバルト三国とポーランドの半分をソ連に併合、バルカン半島をソ連勢力圏にしたが、これはポーランドの現在の教育課程では無視あるいは垂めて教えられている。シベリアやカザフスタンへ強制移送された東欧諸民族——その中には数百万のポーランド国民（ポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人）もいた——の苦しみや、カティンの森で殺害された4万5000人のポーランド将校について、ポーランドの学校は30年以上も何も教えていなかった。

人権保障、教育の権利、知る権利、自由な情報伝達の権利の観点からいって、人々に自らの地平を広げる機会を提供する必要がある。TKNの標的には文学も含まれていた。たとえばミウォシュヤゴンプロヴィチといったポーランド人作家は、若い世代にとって、名前だけは聞かざれば以外のこととはほとんど知られていない存在だった。

この数十年間に世界の哲学や経済学においては、その分野の様相を一変させるほどの多くの発展がみられた。だがポーランドでは、ルブリン・カトリック大学（共産圏唯一の私立高等教育機関）および特定の教授を除いては、公立教育機関は公式的にマルクス主義の教義を教えるだけだ。世界観形成の上で、思想史の知識は重要な役割を果たす——リベラリズムとは何か、民主主義とは何か、議会制とは何か、ヨーロッパの近代国家が形成された19世紀思潮の伝統とは何か。こうしたことについてポーランドで垂められていない知識はほとんど得られなかった。これもTKN創設の理由のひとつだ。

——TKN創設におけるあなたの役割は？

前にも触れた通り、講座が始まった1977年11月に私はポーランドにいなかった。ワルシャワの講座のことはアメリカとイギリスで外国人記者から聞いた。帰国後ポーランド科学アカデミーとワルシャワ大学の同僚から、TKN創設を公に発表する声明の共同署名者に加わってほしいと持ちかけられた。TKNは講座を組織するだけでなく、不人気な分野や当局のお覚え目度くないテーマを研究する人々を援助し、奨学金を提供する目的も持っていた。さらに、外国とコンタクトをとり、公的機関の援助のない研究に奨学金を出し、書籍を手入するといった活動も始めた。最後には、直接講座に参加できない他地域の数百、数千の人々にも講義の内容を広められるよう、テキストや講義録の編さんと発行にも乗り出した。

TKN創設における私の役割は、TKN創設の声明に共同署名することから始まった。58名が署名したこの声明は公式報道機関に送られたが、もちろん報道されなかった。独立新聞にも送ったし、教育関係の機関の掲示板にも貼り出した。共同創設者としての私の主要な役目は署名すること

ではなく、講座の講師のひとりとして、1978年の第1週目から個人の住居内での講義を行ない、1978年と79年の間休まずに続けることになった。

声明の署名者の中には数学者、物理学者、天文学者など、個人の住居での講義を必要としない（公立教育機関の教室で十分に講義のできる）学問分野の人々もいた。彼らの専門分野は共産主義政権から「政治的」学問とみなされていないからだ。まあ、何が「政治的」かは往々にして議論的になるところだが。ともかく彼らは、署名することで一般に認められたその名前をTKN創設の努力に貸し与え、仲間の社会学者、哲学者、経済学者、文学者、歴史学者らへの連帯を表明した。つまり、TKNにモラル的、社会的な信用を与える署名者と、実際の講義活動を行なう者のふたつのグループがあった。

講師としての私は、1939～45年、つまりリッペンントロップ＝モロトフ協定からポツダム会談までのポーランド政治史を体系的に講ずるところから始めた。この時代はポーランド公教育カリキュラムで特に歪曲と無視がひどいところだ。TKNの他の専門家たちは、権力構造、社会生活、社会教育、科学の社会問題、さらに多くの人が関心を持つ映画芸術についても批判的分析の対象にした。

——TKNは〔3国分割時代の〕“空飛ぶ大学”だけでなく、戦間期の自由ポーランド大学やナチ占領下の秘密大学ともつながるものですか？

TKNをドイツ占領下の秘密大学活動と比べる人がよくあるが、このふたつは歴史的にもモラル的にも同列に論じられない。第2次大戦中の秘密大学では、参加した学生、講師、聴講者たちは強制収容所送り、ゲシュタポの拷問、時には死の危険に直面していた。そうした困難や危険とTKN活動を比べるのは少し不遜だと思う。共産主義ポーランドでは様々な自由の制限があるにせよ、ただ講義に出席しただけで拷問や死の危険にさらされることはない（ある種のいやがらせは確かにあるが、ここが根本的な違いだ。もうひとつ、秘密大学には高校を卒業した者だけが参加を許された——つまり閉ざされた、ないし制限された存在で、かつ（例外はあったが）特定の学問分野を専攻する形だった。これに対し、TKNは開かれた講座

だ。大学生も、高卒者も、高校生も、主婦も、講義のテーマに関係ない職業の人でも参加できる。西側世界の公開講座と同じだ。学歴に関係なく講義が聞け、予備知識がなくても質問したり説明を受けたりすることができる。これは教育の民主的、近代的形態だ。戦間期の自由ポーランド大学も高卒資格のない人々を見習いという形で受け入れており、その点ではTKNは自由ポーランド大学の伝統も受け継いだといえる。

——講師はどのように集められたのですか。また講師は当局からの弾圧にありましたか？

講師は言ってみれば非公式な、友情に基づく形で集められた。組織面のことは大抵、TKN書記局がとりきった。後には講師たちの同僚の教授や文学者たちが自ら講師役を買って出るようになった。

TKNにとって大きな問題は、ワルシャワ以外での講師選定だった。比較的近いウーチだけでなく、さらに遠いヴロツワフ、ポズナンまで講義のために旅行するという手間ひまの問題が生じた。どこでも聴講者は各分野のオーソリティーによる講義を期待しているので、講師の人選に困ることもよくあったし、著名な講師が遠隔地まで行くよう要請されることがしばしばだった。

講師が当局から弾圧されたかといえば、答えはイエスだ。弾圧形体は様々で、とりわけ政治的に目をつけられ、治安警察に嫌われている若い人たちがひどい目にあった。アダム・ミフニクやヤツェク・クーロンの講義は〔警察がもぐり込んでいて〕殴り合いで終わったことが数度あった。他にも口ぎたないのしり、押し問答、小ぜりあい、殴打、警察や内務省への喚問、家宅搜索、街頭でのいやがらせ、家族へのいやがらせ、解雇、解雇するぞという脅しなどが特に若い人々に対しておこなわれた。教授や学者相手には、もう少し人目につかない方法が取られた。講義へ出かける途中を警察署へ連行し数時間とか一晩とどめておく、といった形だ。講義に場所を提供した人は軽罪裁判所に略式記訴され、罰金や拘留が言い渡された。罰金は5000ズウォティにものぼり、当時の高卒または大卒の労働者の1カ月の給料に匹敵した。

——講義やゼミナールについて詳しくお話しねがえますか。

ちゃんとした資料を持っていないので、思い起こせることだけを話そう。TKNの初年度は1977年11月からほんの数カ月と、次いで78年2月から5月まで続いた。合計で120の講義が行われた。1度きりの講義もあったが、何回も開かれるシリーズ講義も13あった。その120の講義を約1200人が受講した。正式の受講登録も受講票もなかったのに、参加者数は概算でしかはかれない。参加の際に名前を尋ねられることもなく、実際私はほとんど名前を知らない人々を相手に講義した。今でも昔の受講者から声をかけられることがあるが、私の方では全然覚えていないんだ。

10人程度までの少人数グループ対象のゼミナールも定期的に開かれた。参加者は少なくとも上級の大卒資格者で、政治思想史、思想史、哲学、社会学のゼミナールがあった。これも非常に重要な意味を持っていた。

——講義ではポーランドとウクライナ、リトワニア、白ロシアの関係の歴史にも触れましたか？ またこの問題はポーランドの反対派運動一般の中で関心を持たれていましたか。

目先の抵抗にばかりとらわれず、過去と未来の問題に目を向けていた志ある反対派の間では、この問題は極めて重要だった。知識人にとってだけでなく、この問題に関する知識の欠如や疑問を感じていた若い労働者の間でもだ。しかし私の記憶する限り、TKNの初めの3～4学期にはこのテーマを掲げての定期講座はなかった。問題の一部は他の講義の中で論じられたが。

——第2次大戦中あなたがユダヤ人を援助したことはよく知られています。TKNの講義や研究の中で、ポーランド＝ユダヤ関係はどの程度扱われたのですか。

少なくともふたつの講座がその問題をテーマにした。私自身、1918年から第2次大戦終了までのポーランド＝ユダヤ関係について幾度か講じた。このときの参加者は70～80人もいて、ワルシャワ

の個人のアパートでの講義としては異例の多きだった。講義は録音され、テープが流布されたし、実現には至らなかったが出版計画もあった。またこの問題は「人民ポーランドの歴史」の講座でも扱われた。戦後の人民ポーランドのユダヤ人敵視、スターリン時代や1967-68年の出来事、政策や社会の態度などが論じられた。ユダヤ問題は非常に重要だった。研究についていえば、TKN講師の幾人かは1981年に68年事件に関する学会会議を開こうと計画を進め、実際にTKNの主催で「連帯」の合法活動期にワルシャワ大学で開催した。会議の講演の多くは以前TKNの講師だった人によって行なわれた。

——TKNの講座参加者は何人くらいでしたか。知識人が主体でしたか、それとも労働者階級の人も含まれていましたか。

最初の年度を通じての参加者は前にも言ったように約1200人だ。個々の講義の人数はテーマや開催地により様々だが、10数人から数十人、時には100人近くなった。

参加者が知識人か労働者かということだが、さきにも述べたように参加者には身分証明も名前の

表明も求められなかった。警察のスパイが入り込むこともできた。しかし私の見たところでは大部分は高校生、大学生だったと思う。その学生たちが知識人家庭の出か労働者家庭か農民家庭かまではわからない。少人数のゼミナールや討論会に限ってみれば、参加者は大学生や研究者で、労働者ではなかった。彼らは普段の研究生生活では議論できない各分野共通のテーマを深く討論したくてゼミナールに参加していた。

——TKNはシンポジウムを開いたり、学術書や雑誌を出版したりしましたか？

TKNは「連帯」ができる以前に数度シンポジウムを開いた。「連帯」の時期にも何度か行われたが、その時期にはTKNメンバーのほとんどが「連帯」そのものを含め様々な他の活動に従事しており、そのぶんTKNにさける時間が少なくなっていた。同時にTKN活動の必要性も薄れていた。TKNの理念は広く一般に受け入れられ、TKNが擁護してきた教育原則が数千人を動かしていた。われわれの投じた一石は大きな地すべりを生んだのだ。それはともかく、「連帯」以前にTKNはいくつかの非常に重要な、学問的にも極め



むこう側はハンマーと鎌のマークのついた舟に乗るヤルゼルスキ、手前側は十字のマークのついた舟に乗るローマ法王。「なんであっちばかりに魚が集まるんだ!」

てレベルの高いシンポジウムを主催した。その1例がプロバガンダの言語に関するシンポジウムで、文章に用いた時と実生活で運用した時とで別々の意味を生じるようポーランド語を操作するプロバガンダの方法を分析する最初のころみだった。シンポジウムの討論はTKNにより出版された。

TKNの出版について言えば、いくつかの講義のテキストが出版されたが残念ながら全部は思い出せない。出版を待つばかりになりながら日の目を見なかったテキストや、TKN以外の独立出版所から出たものもあった。

部数は様々だ。数千部のコピーが手から手へと回ったケースもある。色々なグループがテキストを勝手にタイプや謄写版で複製して流通させたことも言っておかねばならない。こうした複製がどの程度の規模で行われたかはつかみきれない。また、少なくとも幾つかの講義は受講者によって録音され、われわれの知らぬところでダビングされて広まっていった。

だから、受講者数や出版と流布の方法といった質問には、私の答えはTKNの知る限りのことであるとお断りせねばならない。その他にTKNのコントロール外でテキストやテープが数知れぬ人々の間に回っていたのだ。

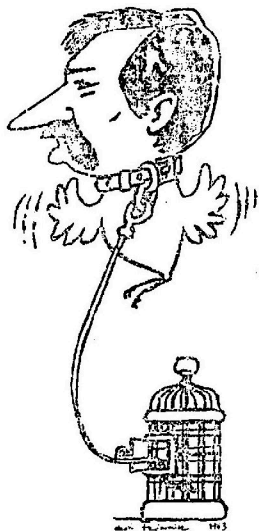
——カトリックの司教会議はTKNに対しどういう態度をとっていましたか。故ヴィシンスキ枢機卿はTKNを支持しましたか。ヴォイティワ枢機卿（現法王ヨハネ・パウロ2世）は“空飛ぶ大学”にクラクフの女子修道院の使用を認めたということですが、他の司教たちも同様の立場をとったのですか。

TKN声明の署名者の中には次のような人たちがいた——ルブリン・カトリック大学教授でクラクフのカトリック系出版所『ズナク [しるし]』の編集長ヤツェク・ヴォジニアコフスキ、ルブリン・カトリック大学の講師アダム・スタノフスキ、カトリック雑誌『絆』の編集員ボジスワフ・シュバコフスキ、『ズナク』編集員ボフダン・ツイヴィンスキ、それに『ティゴドニク・ポフシェフスイ』（カトリック系週刊紙）編集員でルブリン・カトリック大学講師の私。これらの人々は、当人たちは職業的に所属するカトリック系組織の名に

おいてでなく自らの意思で行動していたのだが、社会一般からはカトリック界と同一視されていた。司教会議は疑いなくこの点を無視できなかった。そのうえ当時の首座大司教ヴィシンスキ枢機卿は伝統的な民族的・文化的価値を守ることに非常に重きを置いていた。彼はTKNに好感を持っており、なにものにも邪魔されずに知識を得る権利について幾度か発言していた。1978年3月に司教会議が発表したコミュニケは、人間精神が自由に文化的価値を生みだそうとする時にそれを妨げるあらゆる試みへの非難を含んでいた。そこではこう述べられていた。「文化、人間精神の創造性、そして民族のありのままの歴史を明らかにしようとする努力を、教会は支持する。なぜなら国民は自らに関する客観的事実を知る権利を有するからである。」TKNの名こそ挙げられてはいないものの、コミュニケはTKN活動と同時期に、そして政府のTKNへの最初の攻撃と同時に発表されたため、大きなバックアップだった。同じころ、ヴィシンスキ枢機卿が宗教問題担当大臣にあてた手紙でははっきりとTKNおよび個人の住居での講義に言及し、歴史や伝統に関する講座は青年の自己形成欲求の表明であり、学ぶに値する人間の努力の結晶であると述べたことが知られている。だから、議長のカトリック枢機卿やその補佐役のヴォイティワ枢機卿がいる司教会議は極めて明確な立場をとっていた。他の司教たちについては、なにもぶんTKNの活動は大学のある数都市に集中していたので、全国に7～80人いるという司教すべてについて一般論を述べるのは難しい。手もとに十分な資料がないが、ワルシャワ、クラクフ、ヴロツワフで司教たちがTKN活動に好意を表明したのは確かだ。

——当初、当局はTKNの活動を大目に見たといわれますが、あなたはその意見に同意しますか。もしそうなら、なぜ当局は寛容だったのでしょうか。

私の考えでは当局は最初のうちTKNを過小評価していた。やがて運動の発展を目にして、当局はすばやく反撃に出た——主に受講者へのいやがらせという形で。講義には誰でも参加できたので、いやがらせに“議論の相手”グループが送り込まれることもあった。まともな議論がたたかわされ



れば素晴らしいことで、非常に興味深い民主的思考のレッスンにさえなり得ただろうが、彼らはヤジを飛ばし、口笛を鳴らし、足をふみならし、挑発的な発言をするだけだった。いわゆる限定的寛容の時期はとても短かった。1979年、TKN講師は劇的に減って数人になり、1979年11月にはワルシャワで公開講座を開いていたのは私ひとりだった。その後は互いに知った者同士数人が集まってのゼミナールに限定されてしまった。

——TKNの活動が「連帯」誕生に貢献したと思いますか。また他方、TKNが「連帯」から受けた影響は？

TKNの活動と「連帯」誕生に直接の因果関係を見ようとは思わない。しかしTKN活動が学生、意識的労働者、技師、若者といった活動家グループの教育と基礎固めに役立ち、その人々が後に各地での「連帯」結成に重要な役割を果たしたことは確かにいえる。「連帯」の誕生はTKNの講義の結果ではないが、講義も含めたTKNの発展は、断固たる要求の提出や知識人と労働者の協力を可

能にする状況を生む遠因となった。一方「連帯」の方からTKNが影響を受けたことはなかった。だがTKNメンバーは、顧問として、また全国の工場で開かれた「労働者大学」の講師として、様々な「連帯」の運動に参加した。「連帯」誕生により、TKN活動は新たな形態になったといえる。「連帯」の要請に応じて講師を派遣する講師銀行が作られ、各地の工場で講義が行われた。これは「連帯」がTKNの経験と実績を利用した例だ。

——TKN最大の業績は何だとお考えですか。また逆にどこが不十分でしたか。

最大の業績は、恐怖の障壁を打ち壊して人々を自己教育という目標にむけて結束させ、それを継続する強い意志を持たせられたことだ。これにより基本姿勢の面で質的な変化が生まれた。

だが一方、TKNは全国各地からの要請の多くにこたえられなかった。また、講義テーマが限られており人々の興味や欲求にこたえられなかった。同じことは講師数にも言える。人口3600万のうち数百万人が政治や歴史や社会生活に関心を持つポーランドに、10数人の講師ではあまりに少なすぎた。TKNはむしろ、障壁を壊し新しい道を開くひとつのモデルだった。万人の希望を満たす組織ではなかった。

——戒厳令でTKN活動は壊滅したのですか。

積極的なTKN講師の大部分は収容所や刑務所に入れられた。しかし現在行われている教育運動は、TKNの経験から学んでいるところがあると思う。

つけ加えていえば、私の知る限り、収容所に入ったTKN講師はすべて収容所内で講義をしている。10人の講師がいたある収容所では、協力して体系的自己教育が行われていた。私も約5カ月の収容所生活で約70時間の講義をした。これはもちろん、生きているあかしにすぎない。詩人スウォヴァツキ(1809-49)はかつて言った——「そして船沈みゆくとき、われはマストの上におらん」。船が沈みつつある時も私は最後まで生命のサインを出しつづけるだろう。私はまだ生きている、と。

[訳：高橋初子]

ソ連軍の軍事介入は可能か？

"Kiedy Rosjanie wejdą do Polski"

匿名筆者

"KULTURA" Nr. 6/441 czerwiec 1984 Paryż

1984年4月24日 ニューヨーク

拝啓

私は国内の友人からテープを受け取り、依頼によりそれを書き起こしました。私は編集長〔この論文を掲載したバリの『クルトゥラ』の編集長〕を知っておりますし、編集長も私のことをごぞんじでしょう。しかし残念ながらここで本名を明かすわけにはまいりません、なぜなら、そうすれば第三者がこの筆者たちを特定することが容易になるからです。

もし編集長がこれを活字にしてくださいれば筆者らは感謝するでしょう。かれらは編集作業が不可欠であることを理解しており、主題さえ変更を受けなければどのような修正にも応ずるつもりであります。

最初のうち私はいかれの考えに狼狽いたしました、が、聞きすすむうちに、ついには「帰依」するに至ったのです。ここでは多くのことがらが他のもの、たとえばヘイグ回想録(筆者らにおそらく入手不可能でしょうが)とは異なって見えます。ちなみに、この回想録は(よくあることですが)ヘイグ氏のNATO軍における経歴ほどには注目を集めませんでした。

この文章の筆者たちが、まだ生きていうちに名乗りをあげられることを期待しつつ、心からの挨拶を送ります。

1980年から81年にかけて——8月当時も、それ以前も、以後も、さらには現在においても——最も頻繁にくり返された議論のひとつは、ソ連軍のポーランド侵入の可能性が考慮すべき重要な要素であるということだった。この可能性に対する確信は、自由なポーランド人たちの政策のみならず、

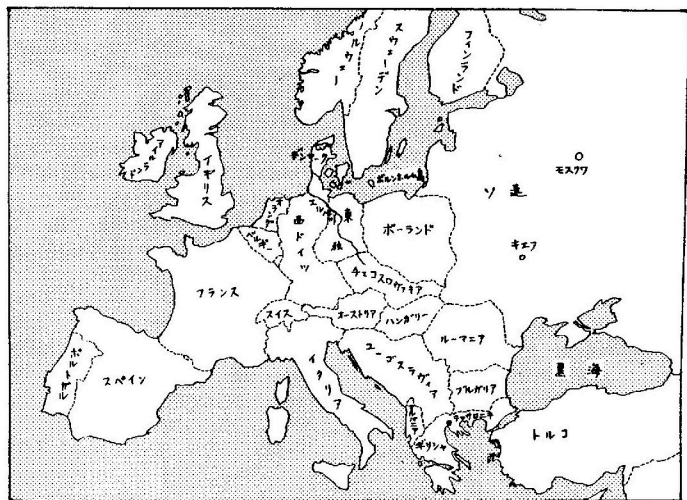
当局への協力者のいく人か、それに西側の有力勢力のほとんどドグマとなりかかっていた。この確信は、長期的に見ればポーランドのためにもっと多くのことができたはずのひとびとが自己弁護するのを容易にした。とりわけ西ドイツのひとびとがそうで、とにかくソ連はポーランドに人らなかつたのだ、最悪の事態は避けられた、といつわりの安堵に胸をなでおろしたのであった。

ロシア軍のポーランド侵入というステレオタイプは西側のマスメディアによって強化された(専門家たちはそうは考えていない) そのことが、末尾に名を連ねるわれわれをいら立たせ、小さな専門家委員会を組織させた。その目的は、本当にロシア軍侵入の可能性があったのか、さらに重要なのは、近い将来、あるいは遠い将来、その可能性があるのかを分析することであった。

遺憾ながら、われわれは自己紹介するわけにはいかない。ただ、われわれのなかには反体制の政治活動家、歴史家、技師、さらに医師までもが入っているとだけは言える。われわれの大部分は第2次世界大戦に参加している、もっともその階級はせいぜい予備役将校で、任務は近代戦にともなう諸問題の解決であった。読者諸氏がわれわれのことを知らなくとも、われわれの専門を知らなくとも、ただ論証の方のみでわれわれの掲げた命題を確信できる(あるいはできない)だろう。

ありえない直接的占領

われわれの命題はこうである。ロシア人たち(むしろソ連人たちとすべきか)はポーランドの真の直接占領を、帝国の諸問題の解決としては最悪の方法であり、いつの日かこうした解決手段をとるかどうかもはなはだ疑問であるとおつねに考えていたし、今もそう考えている、将来もまたそうであ



らう。

この考察では、結論を導き出すための数字や図表、技術的な詳細を省略した。『クルトゥラ』がそうした図解資料を好まないことをわれわれは知っている、少なくともわれわれが手にした号のどれにもそうした資料は見あたらなかったからである。だからヨーロッパ中東部の地図が載らないのであれば、せめて読者諸氏には、エルベ河、キエフ、フィンランド北端、およびギリシャのテッサロニキに囲まれた地形を眺めていただきたい。ここにあるのはソ連に従属している国家群である。これらの大半は人民民主主義国家と呼ばれ（よくある誤解だが）、それぞれの国家間に存在する性格上の差異とソ連の世界征服戦略にとつての意味を吟味しないまま一語くたにして論じられる。われわれはこれらのうち3つの国家——東独、チェコスロヴァキア、ハンガリー——を1つのグループにまとめ、それを前線国家と呼ぶ。これら3国家のなかからヨーロッパへ向けた直接の決定的な「電撃」がほとばしり出ることになる。一見したところとは異なり、世界のほかの部分に直接面している国々に、フィンランドとブルガリアは前線国家ではない。この2つの国からではしかるべき効果をあげる打撃は与えられず、逆に、ロシア国境を脅すことも

できない。

ではルーマニアとポーランドはどうか？ この2国家は前線とはなんの関わりもなく、ただの緩衝地帯、輸送・通信の通路にすぎず、ツァーリ時代のウッチのように軍隊向けの下着類の製造、あるいは、戦争遂行に不可欠なその他の物の生産をまかなう地域である。しかしながらそれは平時の一般的な備蓄のみに限られる、なぜなら、戦時においてこれほど前線に近いところでの軍需生産はあてにできないからである。ルーマニアは典型的な例である。チャウシェスク一座の退化体制は、とりたてて苦勞することもなく、国民を貧困と懲罰のうちにとどめたまま、ソ連経済に必要なものを、決して多すぎずに、もたらし、イスラエルや中国との関係においては（時に控え目ながら）ソ連のために尽す。国際舞台におけるルーマニアの自主独立の演技はクレムリンに利益をもたらさしめる。実のところロシア人は心からかれらの芸を楽しんでるのだ。ブルガリアの場合は少しばかり事情が異なる。かれらはロシア人が奪うことのできる以上のものをソ連に貢いでいる（モスクワの食料品店の棚を見よ！）。「偉大なる姉」との間でブルガリアは流血の争いごとを起したことがなく、したがってこの非前線国家は苦役を免れう

る。ポーランドについては、もちろんもっと詳しく、すこしばかりあとでふれる。

3つの前線国家

しばらくのあいだ、前線国家群をさらに注意深く観察してみよう。ここではすべての十字路口ごとにロシア人が立たなくてはならず、平穏を保つためにはひとびとにすこしはましな生活をさせなければならない。ハンガリーではさきやかな実験が許された、とはいえ、それには身の毛もよだつほどの日和見主義者どもの党が精いっぱい張り、すみやかにモスクワへ報告することが前提であった。同時に、歴大な数の町々には列車からさえ見えるほど駐屯部隊が居ついている。実際、同じ現象が東独とチェコスロヴァキアにも見られる。

これら3つの前線国に見られる完全占領には前代未聞の費用がかかり、たったひとつの救いは帝国内境地帯に位置するこれらの国が比較的ちいさな範囲を占めていることである。ところがこのちいさな範囲においてさえも、1968年にはチェコスロヴァキアへ、自国の軍隊のみならず、ポーランド、東ドイツ、ハンガリー、ブルガリアの軍隊までも送りこまざるをえなかった。この時とくに必要だったのは軍隊で埋めつくすことであり、エリート部隊、たとえば落下傘部隊などは数的にはわずかでしかない。チェコ人とスロヴァキア人に大きな屈辱感を与えることだけが問題ではなく、また、ブロック内の一枚岩ぶりの誇示や共同行動の予行演習だけが問題だったのではない。何よりもまず、自国の軍事行動の経費削減こそが大問題なのである。

はたしてポーランドは東独やチェコスロヴァキア、ハンガリーのような前線国家に将来なりうるのだろうか？ どちらかと言えばそれはないだろう。バルチック海の対岸には、いまだにポルンホルム島を占領したいと望むソ連軍によって脅やかされていいるデンマークの子らさぎたちがいるだけだし、スウェーデンもそれほど恐ろしい、スウェーデンはもはや往時のスウェーデンではないのだ。もっとも、バルチック海沿岸諸国に関しては、スターリンが、羊の目をしてひたすら見つめるばかりの世界の前で、ポーランド同境の移動についての双方の公的立場——東部地域に対する補償（チャーチルの立

場）と失われた領土の回復（ポーランド人の立場）——を踏みにじり、なんの説明もなしに東プロイセンの北部地域を当然のごとく併合してしまったという経緯がある。それはそうと、今日、ソ連の将軍たちはおそらく会議の前には「われらが導き手」に授かった天才を感謝してサタンに祈りを捧げているにちがいない。なぜなら、もし事情が異なっていたら「連帯」はシチェチンとグダンスクにとどまらず、カリーニングラードにもできていただろうからだ。スターリン、モロトフ（祝生誕94周年）、それに、かなり前からこの2人の見習いをしていいたゴムウカらはシチェチンをポーランド人に与えるのを渋った、そうとも、実は与えなかったのだ。かれらのもくろみ通りになっていれば事は沿岸地方だけで終わっていただろう。かれらはチェコ人とか自由都市という言葉をちらつかせた。当時の見習いであった男はいま、スターリンがソ連らしからぬ弱みをかいま見せた一瞬をくやんでいるにちがいない。

広大なポーランド

ポーランドが前線国家になりうるのは緊急の場合、それも部分的なものに限られよう。ロシア人がポーランドに入ったとしても、直接的な占領は地域的に限定、たとえば、輸送・通信の回廊維持という性格をもつことになるだろう。残りの地域は1940～44年のフランス非占領地域と同じになる。もしポーランドから経済的利益が得られなくなれば、クレムリンにとってはその地域で誰が生き残ろうとも興味の対象とはならない。バルチゼンの共和国なるものが成立したところで同じことである。第2次世界大戦の例では、全面戦争の時期にそのような地域が残されることはそれ自体、状況からのまたない脱出口となる。バルチゼンが出没したところで、それはせいぜい象の皮膚にかゆみを生じさせる程度の効果しかない——あるいは疥癬ぐらゐは、と言うのはわれわれの仲間医師。

ふたたび地図に目を向けよう。ポーランドは広大な人口の密集した国である。それは地理的にチェコスロヴァキアや東ドイツ、ハンガリーと同列に扱うわけにはいかない。しかしながらソ連の軍事行動がさまざまな段階のポーランド「半占領」

を見込んでいたとは考えられる。そのいくつかはすでに現実である。エネルギー供給ラインはポーランドを迂回しはじめたし、バルチック海にはリトワニア—東ドイツ間のフェリー航路がつくられつつある。ポーランドの完全占領を考えていてこのような行動をとるものだろうか？ 近代戦争の技術的必要性——エレクトロニクス、コンピューター技術、衛星技術——の観点から、ポーランドのどこに回廊を通すべきか探っているのが実情だと考えられる。それにしてもわれわれはかれらの認識を1つ1つ十分に知っているのだろうか？

すでにふれた通り、戦時中のフランスとの類似は数多い。ヒトラーがフランス国内の大勢力結集をとにかく恐れていたことをわれわれは知っている。折良くベタン〔ナチスによる傀儡政権——ヴィシー政権——の国家主席〕が現われ、フランス人たちは喜々として彼のもとに集まり、仕事に精を出し、ドイツ軍の潜在力の重要な部分——トラックやゲシュタポお気に入りの乗り物（われわれの仲間のうち2人はフランス製囚人護送車で運ばれるという不運にめぐりあった）から、国防軍将校の腕時計にいたるまで——を受け持つことになった。こうして見ると、フランス人とその友人たちの激しい抵抗運動と比べてひどく胸の悪い思いもするが、同時に忠告も含まれている。いわゆる抵抗運動の成果とは言っても、他のフランス人が与えた害に比べればまことに微々たるものなのだ。

まだ類似はある。ヤルゼルスキは心まざしいひとびとにとってのヘタンである。さらに、彼は悲

劇の男だ——これはヘルムート・シュミット〔元西独首相〕の言。しかし、自由フランスがこの「悲劇の」ベタンにとって唯一の判決であったことは記憶しておこう。

余力のないソ連

これでもまだ、ロシア人がポーランドを占領するつもりのないことを信じられない人は、1人で戦争ゲームでもやってみればよい。自動車地獄なり、鉄道地獄なりで占拠すべき拠点を数えあげる。それで？ すべての拠点の指揮官にロシア人を任命しますか？ どう控え目に見積ってもやく百万もの人員が必要になるでしょう。それをどこから調達するつもりなのですか？ もしかしたら非ロシア人の軍人や役人を割り当てることができるかもしれないですね？ それともリトワニア人にピャウイストックの占領をお願いしてみますか？ それから、南部はチェコ人とスロヴァキア人に（ボロニンとフシエミシルあたりで十分）？

とにかく、ポーランド人の抵抗というものは、チェコ人の抵抗とはちがいが、道しるべをひっくりかえすぐらいでは済まない。色々なものごとに感染しやすい占領軍兵士を守るためにはさらに10万からのKGB投入が必要になる。占領とは占領者自身にとって恐ろしい病気ののだ。のみこみの悪い人たちのために第2次世界大戦での事実を紹介しよう。ドイツ国内でイギリス、アメリカの飛行機に向かって対空砲射をしていたのはヴラソフ軍



警備隊の隊

〔ヴラソフはソ連の将軍、1942年にドイツ軍の捕虜になり、以後ナチスに協力してドイツ国内で部隊を編成〕だったというのは誰でも知っている。ドイツは占領に使う兵員はおろか前線へ送る兵員にさえこと欠いていた。スターリンググラードの激戦は、もしソ連軍の攻撃がルーマニア軍に向けられなかったら何ひとつ成果はなかっただろう。この時すでにドイツでは国内の軍隊に配属すべき兵士さえ満足にいなかったのだ。

今日のソ連邦はすでにして広大な前線に気を配らざるをえず、それだけでもすべての重要拠点にロシア人を配置することは不可能になっている。戦線の縮小、たとえば極東の放棄（これは必然でもあるのだが）で何かが変わるかもしれない、だが、太平洋の不屈の防衛者という姿勢の変化は、ポーランドの占領者にとっておそらく帝国の終焉を意味するのだろう。

そうであればなおさら、ロシアのポーランド侵入はありえない。それが信じられない向きは、これ以上この読み物を読まずに、たとえば東独の声にひたすら耳を傾けていけばよいだろう。東ドイツはいまだに当局の公式出版（英語版——いまだきドイツ語圏以外で誰がドイツ語を読むものか！）で、ワルシャワでも流布されてポーランド共和国の将軍らのひそかな喝采を浴びた見解、すなわち、ヤルゼルスキはなにやらの神意を具現した男であり、なにやらおそろしい不幸（ロシア人にとっての）からポーランドを解放した人物であるという見解を表明しているのだ。ウォールストリートジャーナル紙は、ポーランドではすべてが安定して秩序が支配し、あとは借款の問題を片づければよいだけで、中南米のゴタゴタに比べればおおむね状況は良好であると断言している。もしこれらドイツ人とアメリカ人が白国の軍事専門家に尋ねれば本当のところを教えてもらえるだろうに。

西側の沈黙

西側ジャーナリストの一部が何も知らず、何ひとつ考えようとせず、ソ連軍のポーランド侵入というおとぎ話をくり返していることは疑いない。一部はただ単に西側の情報活動の粗雑さが原因であろう。われわれはプラント〔前西独首相〕がゲッターの記念碑の前でひざまづき、ゴムウカと会

談を行った歴史的訪問から帰ってこぼした言葉を覚えている——政治家の屍骸と話すことになるなんて聞かされていなかった！

さらにつけ加える。ソ連がアフガニスタン侵略を準備していたことは、ドゥシジャンベークアブル間、あるいは、さらにインドまでの旅行を準備中だったり、すでに旅行中だったりした何万ものポーランド人が知っていたのだ。ところが、いつもは誇大宣伝好きのCIAだけがそのことを知らなかった。とはいえ、1981年12月にアメリカのマスメディアは、ポーランド国境付近でのソ連軍集結はふだんより多いわけではないとまことに誠実に報道していた。このことは記憶にとどめておくべきだろう。だとすれば、西側の政治家とジャーナリストたちは、筆者らと同じようにロシアのポーランド侵入はないと理解していたことを認めるべきである。だがかれらは沈黙している。それは、ロシアのポーランド侵入という見方を支持した方がかれらにとって戦術的に都合だからなのだ。

ヤルゼルスキの役割

ロシアの侵入がないという事実におかれわれは悲しむべきか、それとも喜ぶべきか。たぶん、喜ぶべき理由などない、非前線国家群のなかでわれわれが他よりも悪い待遇を受けるくらいが関の山だ。しかし政治は喜劇でもないし、悲劇でもない。ひたすら行動すべき場なのだ。他の観点からも政治的に考えることはできるし、そうすべきであろう。つまり、自前の完全なポーランド占領を実行するにあたって当然ソ連が持つであろう抵抗感がそれである。ヤルゼルスキはとりたてて秀でた、神意を具現する男というわけではまるでない。彼は鉄面皮にも自分がポーランドをソ連の占領、あるいはソ連との戦争から救ったのだとうそをついている。なんのことはない、彼はクレムリンの提案を先走って受け入れた内通者にすぎないのだ。ロシア人が彼以外の誰かに呼びかけることができたかどうか、われわれにはわからない。ヤルゼルスキの思想性を疑くるわけではないが、彼の方からその提案を持ち出した可能性も否定できない。およそ実現しそうなポーランド占領を代行するという、提案した本人にとっても（モスクワにとっても）利益の多い考えにモスクワが同意したであ

ろうという確信はある。「連帯」の提案は棄却された。クレムリンの頭には収まりきれなかったのだ。当然、それこそソ連の選択としてははるかに間違いないやり方だということにも気づかなかつた。それにしても「連帯」と占領、この2つの観念の間には巨大な落差がある。ヤルゼルスキは、今すぐに占領した方がソ連にとって「一時的に」最も安上がりで、かつ、長期的にも負担が少ないと解釈している。将軍連の無知無能による経済的破局の深化は（なにしろ軍の仕事は人民から召し上げることであり、生産ではないのだ）ついにすでにふれた軍需品の生産にも影響をおよぼしている（電話、ヘリコプター、飛行機部品、船舶、等々はいまのところまだ大丈夫だが）。われわれは、ヤルゼルスキ体制が自由化の方向、あるいは分別を持つ方向へ移行することなど当てにしていない。PRONが（この書記を党中央委員会書記が兼ねている限り）ひとびとの信頼を受けることはまぎらない。ヤルゼルスキは知らねばならない、占領はアルファでもオメガでもないことを、それはロシア人にとっても唯一の解決方法でないことを。ロシアにはポーランドを占領する力はなく、そのくせそこからなにがしかの利益を引き出そうとしているのだ。自前の金と自前の人間でポーランドを占領しようという悪魔の計画は青い顔の顔の状態にある。いま迫られている選択、それはまた、この状況から脱け出し、非前線諸国家との間に新しい基本関係をつくりあげるための好機でもある。ソ連の党と体制を考えればうまくゆく確率は大きくない、しかし、ソ連が技術的・経済的・政治的理由からポーランドを占領することができないというわれわれの命題に慎重に対応すればそのチャンスはきっと大きくなると思われる。

ヤルゼルスキ将軍への短かな公開状をもってしめくりとしよう。軍人らしい簡潔な文体をとる。

「ヤルゼルスキ閣下！ われわれを脅すのはやめてください。あなたの老友ツイランキェヴィチの国会における発言を思い起こしていただきたい。彼にはしばらくのあいだ閣下がピウスツキに思えたそうです。ロシア人が閣下を来ないことは閣下がほかの誰よりもよくごぞんじのはずです。もし閣下に、奈落の底へ転落しつつある国家を救う気持がまだいくらかなりともあれば、もし閣下がご



自分の名声のなにかしかを救おうとお思いならば（もしそれが可能ならばですが、しかし決して遅すぎるということはありません）、伍長なみのやり方を放棄してください。それはポーランド人の物質的・精神的貧困を深める以外に何ももたらしはしないのです。それよりも、現実のソ連に目を向け、もう少し違った振舞いをしてください。そうしたところでいま以上に悪い事態を生み出すことはないでしょう。それとも閣下はベタンの轍を踏み、民族と歴史による不可避の判決を受けるつもりなのでしょうか。ソ連の同志たちのことをお尋ねですか？ 閣下はすでに、ご自分で想像している以上に多くのものをかれらに与えています。これからは、考えそして行動することで男らしさを示すべきなのです」。

Z、Y、X、V、U、T、S、R、P、O、N、M、L

（『クルトゥラ』編集部注：筆者らの氏名、住所は本当に編集部には知らされていない）

〔『クルトゥラ』 1984年6月号 パリ

訳：篠崎誠一〕

過去を向いた予言者たちの集い

——第13回ポーランド歴史家大会傍聴記

伊 東 孝 之

ボズナンで開かれるポーランド歴史家大会に出席するため、ベルリンから車でポーランドに入った。国境で人国審査官に職業を訊かれたので歴史教師と答えると、「グルンヴァルトの戦いはいつか？ 1月蜂起は？」と矢継ぎ早に質問がかえってきた。本物の歴史家かどうか試してやろうというわけである。

ポーランド人の歴史好きは有名である。たまたま列車や喫茶店で隣り合った人の該博な歴史知識に驚かされるがよくある。こうしたポーランド人の歴史志向はおそらく19世紀に遡るものだろう。19世紀は西欧では科学信仰、進歩主義の世紀として知られているが、ポーランドでは何よりもロマン主義の世紀であった。よく「19世紀はポーランドを通り過ぎてしまった」といわれるが、これはポーランド人が西欧的な意味での19世紀を経験せずに今世紀を迎えてしまったことを指している。しかし、こうした事情は歴史的関心にはむしろ恰好の土壌をなしたのである。周知の如くロマン主義こそ近代歴史学の母であった。

歴史への関心は国家の喪失によって一層強められた。「歴史のない民族は幸せである」とはイタリアの啓蒙思想家ベッカリアの言であるが、ロマン主義的なポーランド人に言わせればそれこそ不幸以外の何ものでもない。歴史意識がなくなれば国家再興の希望も潰れる。独自の歴史意識こそ民族の生存を保障するもの、とポーランド人は考えた。だから歴史意識の形成者、広い意味での歴史家は特有の使命感を発達させ、社会の尊敬を集めることになる。「ポーランドで歴史学が占める地位の特異性は」と、歴史学者ウェブコフスキは書いている。「その最もすぐれた代表者が自分の職業を愛國的召命、社会的奉仕と考えたことである。こうした態度の何がしかが今日まで残っている。ひよっとすると10年前よりももっと一般的になっているかも知れない」（『ティゴドニク・ポフシ

ェフメイ』84年8月19日号）。

ポーランドには「歴史協会」という大きな歴史家の組織がある。これは社会主義国に多い作家同盟、新聞人同盟などのいわゆる「大衆組織」に似ているが、その起源と性格において大きく異なっている。歴史協会は百年前の1886年に当時オーストリア領だったルヴフに創立されているから、社会主義政権より大分先輩である。たしかに戦後一時統一労働者党（共産党）の意思を歴史家「大衆」に伝える伝導ベルトという役割を果たしたが、今日では再び国民の歴史意識を彫琢する者の任意団体という伝統的性格を強めている。

他方で歴史協会は西欧諸国や日本にあるような純粋の学術団体でもない。学会というよりも一種の国民運動本部といった方がよい。会員数も4000人と十分「大衆的」である。当然専門の研究者ばかりではなく、学校教師、学生、民間の郷土史家なども加わっている。5年毎に開かれる大会は専門研究者が虚栄心を逞くして新知見を披瀝し合う場というよりも、むしろ歴史愛好家が特定のテーマについて日頃の蘊蓄を持ち寄り、お互いを啓蒙し合うとともに、また国民を啓蒙するための場である。

前回の大会はギエレク時代の末期、1979年にカトヴィツェで開かれた。この時にすでに今回の大会のための共通テーマ「歴史と社会」が決定されたが、それはある意味でその後の発展を先取りするものであった。80年8月にグダンスク協定が調印されると、そのインクも乾かぬうちにジェロナ・グラに総会が召集され、グダンスク協定を全面的に支持し、歴史研究者の倫理の確立、検閲の制限、史料の公開、大学、学会の自治、教育・研究内容に対する当局の干渉排除などを訴える決議が採択された（『ジチュェ・ヴァルジャヴィ』紙80年10月15日付）。歴史協会は戒厳令施行とともに活動停止となり、ようやく1982年8月に再開を許

された。

今回の大会に先だって協会が発したアピールは、ポーランドの歴史家がいかにか自己の伝統的役割に忠実であろうとしているかを示している。「わが国においては歴史知識は特別の意味をもっている。隷従の時代にそれは人々の心を暖め、独自の民族意識の基礎を創り出した。それは尊厳の感情、愛国主義、自由、民主主義、寛容、真理の探究という社会的にとくに貴重な諸価値を守ってきたし、今日も守っている」（大会プログラムより）。歴史家は過去を向いた予言者である、とはドイツ・ロマン主義の哲学者F・シュレーゲルの言葉であるが、まさに今日のポーランドの歴史家にふさわしい。

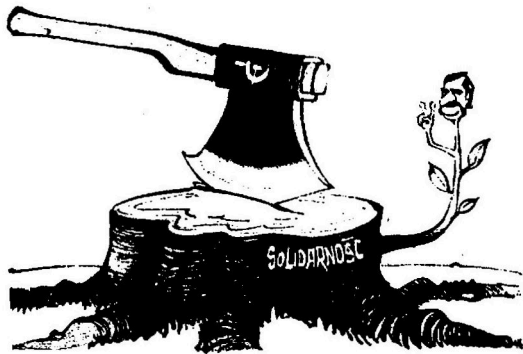
大会の開催は容易なことではなかったらしい。当局は何度も干渉し、開催を延期させようとした。6月には協会会長A・ザホルスキが準備委員会に向かう途上警察に一時拘留されるという事件が起きた。当局がとりわけ警戒したのは、これを機に歴史家と一般社会との接触が深まることであった。とくに学校教師の参加を極力妨害しようとした（L・グルシチンスキ『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』誌84年9月30日号）。国内の報道機関は中央の2誌とポズナンの地方紙を除いてほぼ沈黙を守った。慣例となっている外国代表団の招待は中止された。もともと社会主義国の代表団は招待されたとしても、向こうから参加を断わってきたかも知れないが。

しかし、大会は9月6—9日無事開催された。

参加者は1600人とかつてない盛況であった。大会を象徴したのは、会場のポズナン大学を見守るかのようになっている1956年の暴動の犠牲者の巨大な慰霊碑である。これは「連帯」時代に建てられたもので、その上にただ1956、1968、1970、1976、1980とのみ記されている。5つの数字はいうまでもなく労働者や学生の抗議運動が起きた年を示している。慰霊碑の前には今でも花輪が絶えなかった。

大会は全体会議、部会、シンポジウム、公開講演の4つに分かれ、合わせて41のセッション、約120の報告があった。中心をなしたのは部会、シンポジウムである。部会は3、シンポジウムは18もあり、真中の2日間に集中して開催されたので、到底1人の参加者が全部を見てまわることはできない。全体のバランスのとれた報告は大会記録集が公開されるときに譲るとして、今回は廊下トンビの眼にとまった2、3の特色を印象派風に指摘するにとどめたい。

第1に現代史のテーマ、ないし現代に関わりの深いテーマが多く取り上げられたことである。シンポジウムの半分以上はこうしたテーマを取り上げている。統計的に見て歴史研究者の半分以上が現代史専攻ということであるから、こうした結果となるのはむしろ自然なのだが、今までは真面目な研究者は現代史のテーマを避けて通る傾向があった。というのは、他でもなく現代史にタブーが集中しているからである。戦後ポーランド史学において指導的役割を果たしてきたキューニェヴィチに



よれば、それはとくに3つの問題群に関わっている。(1)現代の政府陣営の前身の歴史、(2)人民ポーランドの政治史(部分的に経済史)、(3)ソ連=ポーランド関係史(ときにはロシア=ポーランド関係史にまで遡及)、『ポリティカ』誌1980年10月18日号)。

ところが、今回の大会プログラムを見てみると『大衆的社会運動における強権行為』、『ワルシャワ蜂起の国際的側面』、『人民ポーランドにおける政治エリート、1945—48年』などと、まさにタブーに挑戦するテーマが目白押しである。はたしてこれらのシンポジウムは例外なしに超満員の盛況であった。この他にも人気のあった『にせの愛国者と本物の愛国者』は18—19世紀を対象にしているとはいえ、ロシア=ポーランド関係史に踏み込むもので、現代との関わりが強く意識されていた。また『人民ポーランドにおける社会の創造的過程』は「連帯」を含む戦後のさまざまな非政府的組織の創造活動、『アジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける軍事政権』はポーランド自身の軍事政権をそれぞれ暗に念頭においたものであった。このようにポーランドの歴史学者は進んでタブーに挑戦し、共産党政権下で蒙った汚名を挽回しようとしているように見える。

第2に、公然と反体制の旗じるしを掲げている学者が報告者として招かれたことである。たとえば、『にせの愛国者』のM・クルル、『政治エリート』のJ・シマンデルスキがそれである。『政治エリート』にはJ・スタニシュキも招かれており、『社会学者の眼で見たエリート』という報告をする予定だったが、どういものか当口姿を現わさなかった。報告者ではなかったが、A・ミフニク、B・ゲレメクが来ていた。K・モゼレフスキは事情で来れなかったということである(『アンセンサード・ポーランド』1984年10月18日号)。

もちろん、これらの学者が主役を演じたわけではない。大会で主役を演じたのはやはり伝統的なアカデミズムの代表者である。ポーランドにおけるアカデミズムの権威はまだまだ強固なものがある。今回の大会において新鮮な驚きをもって受けとめられたのは、恒例に反して現代史学界の長老、ワルシャワ大学教授、現国家評議会議長(国家元首)H・ヤブウォンスキが招待されず、儀礼的な挨拶の機会も与えられなかったこと、これに対

してシマンデルスキのような大学を出たというだけで何の学者としての肩書ももたない人間が報告やフロアからの発言を許されたことである。アカデミズムは明らかに政治権力に対する自尊心を高め、反体制的な学者をその庇護の下におく用意を示したのである。しかし、他方で「連帯」運動への反省もないわけではない。『大衆的社会運動における強権行為』は直接には第二次大戦前のスト運動などを対象としているが、同時に「連帯」運動も念頭においたことは疑いの余地がない。

精彩を欠いていたのは党員研究者である。党員学者はもはや主流ではなく、その発言の自由が特別に保護されなければならない少数派として討論の席についている感があつた。たとえば「政治エリート」のJ・ヤブウォンスキは単にデータを提供するだけという値まじい役割に甘んじ、『ワルシャワ蜂起』でフロアから発言したE・ドゥラチンスキは亡命政府の政策を非現実的で無責任と批判したが、大方を納得させることができなかった。1人気を吐いていたのは「理論と歴史」部会を主宰したJ・トボルスキである。トボルスキは他にも共通論題「歴史と社会」の提唱者で、かつホスト役の1人であった。しかし、その方法論部会は出席者僅か20数人という侘しさであった。マルクス主義史学のジャルゴンが地を払ったように姿を消したのも今回の大会の1つの特徴である。トボルスキの鋭い問題意識はある意味ではマルクス主義史学の危機を象徴していたといえよう。

第3に、学校教師、若者の参加が目立ったことである。『歴史教師の倫理』シンポジウムは600人の参加者を集め、大きな成功をおさめた。戦前の日本では、事実即して比較的自由に議論し合える専門研究者の世界、いわゆる密教の世界と、公認の歴史観を奉じなければならない歴史教師の世界、いわゆる顕教の世界が画然と分かれ、2つの世界を往来する者は巧みに言葉を使い分けなければならなかったといわれる(斎藤孝『昭和史学史ノート』1984年)。同じような現象が今日のポーランドにも見られる。たとえば、キューニェヴィチは次のように述べている。

「5—15人の研究会の席でなら、史料から明らかとなるどんなきわどい事実についても、また外国の関連文献や裏付け可能な推論や仮説についても全く拘束なしに、大っぴらに議論できる。聴衆

が数十人、数百人になってもより中立的な言葉さえ使えばほぼ同じことを話すことができる。障害は活字となるときから増大する。とくに発行部数が数千ともなると公式見解への接近が要求される。マス・メディアで発言する段になると、干渉は全く圧倒的となる」（『ポリティカ』誌前掲号）。

大学に関しては、1982年5月の新大学法によって正式に研究方法、世界観の多元性が認められた。同じ自由を低いレベルの教育機関にも認めよ、という声が高まっているが、壁がなかなか厚い（H・イズデプスキ『ポリティカ』84年9月22日号）。歴史教科書はいまだに厳しい検閲の下におかれている。このため研究者としてはほとんど無名の人物が当局の意を受けて教科書を書き、真面目な学者は一切タッチしようとしないう傾向がある。しかし、歴史家大会はこうした密教と顕教の壁を取り払ったばかりではなく、公認の教義そのものをも掘り崩す働きをもったのである。

若者の進出も特筆すべき出来事であった。ザホルスキによれば、学生・若者が歴史家大会に参加したのは今回がはじめてのことである。「連帯」運動の洗礼を浴びた世代はタブーも恐怖も知らない。「政治エリート」でフロアの若い女性が「共産党の独裁政権は戦後ソ連の武力によってポーランドに押しつけられたものである」という趣旨のことを発言した。私はハッとしたが、本人はそれほど勇気を奮っているように見えなかったし、聴衆の方でもなにか偶像破壊的なことを聞いたという素振りを見せなかった。他方で、このアンファン・テリーブルたちが国籍不明者ではなく、伝統的なポーランドの歴史家の姿勢を受け継いでいるように見えるのは興味深い。おそらく大学を出たばかりの若い学校教師が「自分は神父や医者と同じく歴史教師の職を天職と考える」との所信を表明したのが強く印象に残った。

最後に、今回の大会はすぐれて学際的であった。ご多分に漏れず、ポーランドにおいても歴史学者と社会学者の間の反目は根深いものがある。しかし、今回の大会においては、おそらく共通論題が然らしめたのであろうが、両者の提携がうまくいっているという印象を受けた。随所で社会学者から学ぼうという歴史学者の側の真剣な姿勢が感じられた。たとえば、『社会学者の著作における社会的変化の構想と計画』という特別のシンポジウ

ムが企画された。この他にも社会学者のみならず、政治学者、心理学者、法学者などが報告者として招かれているシンポジウムが数多くあった。

文学者との協力への意欲も感じられた。『ポーランド史における神話と定型』という部会はおそらく文学者M・ヤニオンの示唆に基いており、他の部会、シンポジウムにおける討議にも大きな影響を与えた。こうしたアプローチはマルクス主義史学にも多い実体主義的な解釈、あるいはポーランドの伝統史学にありがちな道徳主義的な解釈克服の助けとなることだろう。

ザホルスキはつぎの言葉で大会を締めくくった。「この大会においては完全な発言の自由、他者の意見に対する寛容が支配したことを確認したい。何人も真理の専売権を有しない。真理と自由の追求は侵すべからざる人権である」。大会を傍聴した者ならば誰もこの言葉の真实性を疑うことができないだろう。いろいろと不如意なことが多い今日のポーランドで、歴史家大会はまさに精神のオアシスであった。

ザホルスキの結語のなかでもう1つ記憶に残った言葉がある。「外国の代表団、とりわけ社会主義圏の代表団の参加がなかったことを大変残念に思う。しかし、いろいろな困難にもかかわらず、イギリス、フランス、ベルギー、アメリカ、カナダ、さらにははるばる日本からも個々の参加者があったことを喜ぶたい」。明らかにこれは外国人の参加に障害を設けた当局に対する揶揄であった。しかし、私は同時にこちらの意図を知りつつ歴史家への尊敬心の故に入国を黙認してくれたあの入国審査官の顔を思い浮べざるを得なかった。外国からのもぐり参加が多かったのは、なにも大会事務局の鷹揚さのおかげばかりではなかったのである。

いとう たかゆき 1941年生まれ。歴史学者、ポーランド資料センター幹事。主論文に「ポーランドにおけるノメンクラトゥラ論争」（『共産主義と国際政治』誌）、「知られざる党内闘争 ポーランド水平運動の軌跡」（『現代の理論』1984年8～9月号）など。

新語法の手引き

支配者用語の基礎知識 (2) < しんぼ

Łopatologiczny słownik nowomowy

Hebdomadaire de Paris No. 12 (79), 1984. 9. 15

警察機動隊 → ^{ゾモ} **ゾモ**

現実 (1) ポーランド統一労働者党の強硬派の機関紙 (週刊)。

現実 (2) アバラートが望んでいる状態。

現実の社会主義 ソ連をはじめ人民民主主義諸国を支配している政治的、社会的制度。マルクス＝レーニン主義の具体化された姿。

経済の基本的メカニズム。A: 価値基準は自国通貨ではない。価値があるのは ① (公式には) マルクス＝レーニン主義 ② (陰では) 配給券 ③ (必然的に) 米ドル。B: あらゆるもの、即ち国民とその頭脳も国家の所有物である。国家はアバラートが所有している。アバラートは中央が所有し、中央は不滅のレーニンと歴史に対してのみ責任を負う。

原則との整合性 アバラートから党員に求められる基本的姿勢。党の最新の方針および現在義務づけられている行動基準に無批判に従うこと。方針その他は非常に急激に変化し、矛盾が発生することもあるので、原則との整合性には敏捷な反射神経と弁証法的思考が必要である。

現存社会主義 → 現実の社会主義

公安 → 保安局

行進 マルクス＝レーニン主義における祭日に旗とアイコンを掲げて行う行進。人民民主主義諸国のマルクス＝レーニン主義信者たちおよび平民たちはメーデーの行進に参加しなければ特別賞与等の特典にありつけない。ソ連では他に10月革命記念日の行進が義務づけられている。

国際主義的義務 ソ連が各国に対して行う干渉。(統合を参照) 用例: 「国際主義的義務の遂行途上において死を遂げた」(アフガニスタンで死んだ赤軍兵士の両親に送られてきた通知書)。

国内亡命 「地下でさまよっている」「敵対的センターの言いなりになっている」「迷える、まどわされている」等の意。社会参照。

国民的合意 国民がアバラートにより武装解除されること。社会はそのために政治的、社会的、経済的状况について評価する権利を自主的に放棄せねばならず、党綱領に完全に従わねばならない。

国民的再生 国民的合意と同じ意味。ただし1981年12月13日以降用いられるようになった。

コスモポリタニズム 「民族を超越する考え方」ソ連の利益に合致しない国際的活動。

国家 国家とはアバラートである。アバラート自身、「われわれが国家である」と言っている。

刷新 (オドノヴァ) 社会主義的刷新。社会の圧力により定期的にしなければならない「みそぎ」。そこで党は昔の誤り(党綱領)を清算し新たな誤りを犯すのに必要な信用を社会に強要する。社会的刷新の「みそぎ」儀式は次の手順で行われる。

① 社会の爆発的抗議により誤りが明らかにされる。② 党は自分の正統性を主張しつつ、誤りがあったことを公表する(すなわち、そろそろいまの党綱領を清算する時期が来たということ)。③ 党によってスケープゴートが選ばれ、彼らがあらゆる罪を着せられる。④ 新しい党綱領が採択される。⑤ スケープゴートの公開処刑(見せかけだけである)。⑥ 社会抗議の指導者たちを秘密裡に処分する(見せかけではない)。⑦ スケープゴートを安全な場所に隔離する。⑧ 党により、経験が豊富になった分だけ改良された形で新たな誤りが犯される。⑩ 社会の爆発的抗議により誤りが明らかにされる。⑪ 以下同じ。

さらなる…… (さらなる成功裡の発展、さらなる党員の増加、さらなる党への信頼の強化、など) この形容詞はある過程が完全に崩壊し党が残ったものを絶望的に守ろうとするとき用いられる。さらなる成功裡の発展という語は1976年に使われ、さらなる党への信頼の強化は1982年、1983年には経済と通貨のさらなる安定が言われている。

自然発生の支持 ある課題に対して社会の代表

たちにより表わされる熱狂。マスメディアのエージェントの監督下に行われる。

社会 新語法における社会とは普通一般に言われる社会の一部であり、狭い意味では物質的利益を通じて党綱領と結ばれている集団、より広い意味では党に対して批判的な行動を一切したことの無い集団をさす。狭義の社会とはアバラート、ノメンクラトゥーラの人々、警察、軍、国家機関の一部（上級職の人々）および閣下屋、自動車売買業者をさす（ポーランドでは約50万人）。広義の社会は小学校児童、ばけ老人、考えることを必要としない職業の人々（運動選手、アナウンサーなどの多く）、および自分の生活水準が当局の判断により低くされることを極端に恐れる、性格の弱い人々（芸能人の多く）などをさす（ポーランドでは約500～800万人）。社会に属さない人々は以下のとおり。労働者、農民、俳優、作家、中学生、高校生、大学生、教員、技術者、医療関係者、郵便局職員、温室経営者、鉄道労働者、職人などの大部分（ポーランドでは2900万～3200万人）。

新語法ではこれらの人々のことを国内亡命者、地下でさまよう人々、敵対的センターの言ひなりになる人々、迷える、まどわされた人々などと呼ぶ。

社会主義 (1) 歴史的用語。仮説上の社会制度。それは各人の能力に応じた仕事、労働に応じた報酬、そして個人の自由、思想、言論、報道、集会、結社の自由により象徴される。

社会主義 (2) 新語法辞典によれば、西側諸国には社会主義は存在していない。

社会主義 (3) 人民民主主義諸国における意味については、現実の社会主義を見よ。

社会主義的 この概念の意味はポーランド語に翻訳不可能である。長年悪用され、現在もはや何の意味も持っていない。しかしこの形容詞を名詞につけると意味が希薄になるか、あるいは完全な反対語になってしまうという特異な性質を持つ。たとえば、社会主義的民主主義、社会主義的社会、社会主義的正義、社会主義的経済、社会主義的建設、社会主義的教育、社会主義的倫理など。

社会との会話 社会の代表が参加するプロパガンダ活動。値上げや国家に忠実な労働組合を組織するなど実施にあたって社会の明白な抵抗にあうであろう場合、アバラートにアリバイを与えるもの。

社会の代表 社会の一員。アバラートにより任命される。時には普通の容貌をもった人間であることもある。彼らの責務は、公的に党綱領への賛同を表明することである。愛国者、真の労働者、ポーランドの母などが同意語。活動家を参照。

真実 (ブラウダ) (1) モスクワで発行されているソ連共産党機関紙。

真実 (ブラウダ) (2) ブラチスラヴァ（スロヴァキア）で発行されているスロヴァキア共産党の機関紙。モスクワのブラウダの支局。

真なる情報 モスクワのブラウダに既に載ったか、問題なく載せられる情報。あまりにも出来すぎていてモスクワのブラウダでの公表をばばかられる場合はたとえばブラチスラヴァなどで発表される。↔にせの情報

進歩的／反動的 進歩的：ソ連の平和のための戦いを助け、ソ連の世界への影響を促進するあらゆる行為。反動的：それを妨害しようとするあらゆる行為。進歩的な中で最たるものはプロレタリア国際主義、反動的な中で最たるものはアメリカの軍備である。この区別は過去の出来事にまで適用される。世界史において進歩的なものはロシアを強大化させた要素すべてと、マルクス＝レーニン主義教義に有利に解釈される出来事すべてである。両者の間に矛盾が生じた場合は、前者（ロシア）をとる。進歩的であったのは、ロシアによるシベリア征服、グルジア、アルメニア、バルカン諸国の併合、クリミア・タタールの撲滅であり、^{チェコスロバキア}CK（ソ連国家保安委員会）やUB（ポーランド保安部隊）、カンボジアにおけるクメール・ルージュの活動である。進歩に役立っているのはS S 20ミサイルやバックファイアー爆撃機、フランスの労働組合CGT。反動的な役割を演じているのはMXミサイル、パーシング・ミサイル、フランスの労働組合FOや米国の組合AFL-CIOなどである。15～18世紀のウクライナがポーランド支配下にあったことは反動的であり、独立自治労組「連帯」はもちろん反動的である。



「連帯」運動の原点にむかって

加藤 一夫

「連帯」運動の高揚からすでに5年。だがポーランドは、過日のポピエウシコ神父の誘拐殺害事件などからみても国内状況は悪く、人々の表情は暗い。経済状態もあまり改善されず、暮しも向上していないようだ。ヤルゼルスキ体制に対する民衆の不満もだいたいたまってきているようだし、一部の知識人の間では無気力感もただよい始めているという。こうしたなかで、「連帯」運動は地上と地下であい変わらずがんばっている。「連帯」運動ははまだ終わっていないのである。

今、欧米諸国でも日本でも、「連帯」運動が提起した運動や思想について改めて再検討し、再評価する動きがおこっている。特に欧米の社会主義者の間で論議が高まり、すでにこの間かなりの研究書も出されている。私自身も、研究者の端くれとして、そのいくつかに目を通して見たが、今さらながらそこでの研究体制と研究者層の厚さに感心し、うらやましく思った。手弁当でシコシコやっている自分の研究などとても足元にも及ばない。

日本でも、この運動の華やかなりし頃に一時、ポーランド・ブームが起こった。総評が「連帯」のフレサ委員長らを招いて大いに持ちあげたのもこの頃だった。マスコミも盛んにこの運動をとりあげた。この頃は、だから、ポーランド文化やポーランド語に関心を寄せる若者も急増し、国会図書館にいる私のところにも多くのレファレンスがあり、かなりの人々が資料を求めてやってくる。もっとも資料のあまりの少なさに皆おどろき、かつ失望したのだったが……。それが今や、関心は遠のき、「連帯」運動はすでに終わったと思われるらしい。あるジャーナリストの言葉によれば、今やポーランド問題はダサく、アフリカ食糧援助がナウイ問題になっているのだそうである。「連帯」も、今考えると、この手の腰の軽いジャーナリストの手で報道されたのが不幸の始まりだったのかもしれない。

ない。いや、やはりその原因はわが国の研究体制の不備にある。しかも、大学や研究機関は、最近の行革のあおりで、真先にカットされるのが社会主義諸国の研究資料費だと、友人の大学教師から聞いている。要するに、研究総括をする条件を日本では完全に欠いているのである。もっとも逆にいえば、それゆえ、本誌『ポーランド月報』のような薄っぺらな雑誌が団体以上の働きをしなければならないということになる。これは大変いいことだ。しかも本誌はやっと軌道に乗り出した。大変嬉しいことではないか。

実践的問題意識からの検討

それはともかく、欧米諸国の研究をみると、一部に戦略的理屈でだされている部分もあるが、ポーランドの政治的・経済的相互依存性や、亡命知識人を受け入れるという文化交流状況のなかで、検討範囲がかなり広い。例えば、この運動をポーランドの歴史の流れと結びつけて論じたもの、社会運動の独自性を強調したもの、ポーランド革命のひとつとして評価したもの、ポーランドの枠をこえて「現存社会主義」体制変革の一環として、社会主義社会における階級闘争として位置づけたものなど、様々な側面に及んでいる。これらの内容について、私自身もいざれ他日に詳しく論じてみたいが、ここで重要なのは、これらの研究で共通する問題として、「連帯」が現代の閉塞状況に風穴をあける思想的武器として、また社会変革の思想的インパクトとして受けとめるという極めて実践的な問題意識と結びついているということである。

この点では、わが国でも今、少数の研究者や運動の活動家の間でこの運動を再評価しようという動きがある。ここでは、社会主義の再生という問題意識との関わりで論議されている。これは、1981年秋の「連帯」大会で提起された「自主管理共和国」（ないし「自治共和国」）

の理念を、どのように今、現実的なものにするかという模索である。そして民衆抑圧機関としての社会主義国家という怪物退治の武器としてよりも、社会主義の基本原則そのものを捉え直す方法として検討されている。その極端な例は、国家権力をテコに計画経済を組織化する方向にかわるものとして、大衆の成長による自主管理の経済体制を考えようという動きである。そこでは、貨幣と商品流通を廃止するという社会主義本来の目標を変更し、共同体の復権に力点を置き、地域コミュニティを設立し、企業を自治共同体としての自主管理企業につくりかえるというものである。その場合、インフレを抑制することに力点を置き、ある程度まで企業閉鎖や失業を認めて社会を活性化しようという構想である。当然、これに対して、余りにも「行きすぎ」だとか、素朴すぎて非現実的だという批判もおこっている。私自身もそう多少思うのだが問題は、理念を「連帯」の手から離して現実に適用する時、その背後にある問題とその内容の分析なしに短絡的に理論化してしまうことにあるように思う。

そのことは、例えば、戦後の「人民民主主義」評価について、大部分のマルクス主義者が「ブルジョア民主主義にかわるプロレタリアートの民主主義」、「新しい民主主義」として実態抜きに無批判に飛びついたことにも似ている。中国の文化大革命の評価や、最近のユーロコミュニズム論議にも同じ傾向がみえる。現在の自主管理論ブームにも何となくそれを感じる。

ナショナリズムの問題

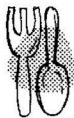
本誌前号のこの欄で井汲卓一氏が出されている「独立社会」の理念についても同じことが言える。氏はこの理念について、「自らの権力を国家なるものに疎外しない、自己権力としての社会」の追求にあると評価して「国家の魔絶は、ただ、その闘いのなかで持続的に生み出されていく自主管理社会の形成を通じてのみ、独自のつくり出されてゆくのであり、その社会の発展のなかでのみ国家は魔絶され、死滅してゆく

であろう」と述べておられる。恐らくその通りであろう。だが、「連帯」の提起している「独立社会」が、そのまま国家魔絶の思想性と結びつくだろうか。大変疑問である。詳しく述べる余白がないが、その理由のひとつに、ナショナルなものの投影が挙げられる。ナショナリズムが現在の運動のエネルギー源になっており、たどっていくとそこにかつてのシュラフタ共和制の姿が浮かんでくる。理念の方向がどうやら過去に向いているようなのだ。そのことを考える必要がある。現在の核状況下で、世界は何となくその当時の歴史状況に似てきている。どこでも国家が幅をきかせている。だが、あの共和国は隣接諸国に分割され、その理念も挫折したのである。とすれば、理念は未来を向き、現在の状況を打破し、世界を変えるものと結びつかねばならないだろう。そこで私は、社会主義社会の胎内から噴出しているナショナリズム——単にポーランドだけでなく東欧諸国全体にみられる——を正当に位置づけて評価し、それを「第三世界」の解放闘争や、先進資本主義諸国のなかの多様な動きと結びつける、いわばインターナショナルナリズムの糸口をどのように発見するかという点が重要だと思う。理念もその前提で評価したい。歴史状況から切断して理念をモデル化することは、結局おいしい部分のつまみ食いになってしまうのではないだろうか。

「連帯」は様々な問題をかかえ、複雑多様な性格をもちながら、今後長く続いていくだろう。それゆえ、何度も何度も闘いの原点に立ちかえって再検討していくことが、今後ますます重要になってくるだろう。

幸い、今年から一部の研究者と活動家の手で「社会主義理論フォーラム」が発刊する。私自身も、これに参加しながら広い討論のなかで、「連帯」が提示しつつある色々な問題をじっくり考えてみたいと思っている。

かとう かずお 1941年北海道生れ。ポーランド近・現代史専攻。国立国会図書館文教課勤務。ローザ・ルクセンブルク『民族問題と自治』（論創社、1984年、共訳）ほか。



作ってみませんか ポーランド料理

工藤 久代さんに関く

kuchnia polska

サワークラウト

長く厳しいポーランドの冬、生野菜はほとんどとれませんから人々は夏や秋のうちから保存野菜作りにせいをします。野菜の塩漬け、果物のシロップ漬け——。今回は塩漬け発酵キャベツをご紹介します。ドイツ語ではザウアークラウト（カタカナでは英語読みでサワークラウトとも書かれます）というごとくドイツ人の食卓にもしばしば乗る食物で、純粋ポーランド産料理ではないのかもしれませんが、ポーランド人が非常によく食べるものですから登場させることにしました。ビタミンCがとても豊富、繊維分もたっぷりです。

材料

キャベツ 5kg (5~6個)

- | | | | |
|---|---|--------------|--------|
| ④ | { | 塩 100g | |
| | | 水 5カップ | |
| | | 粒コショウ 5~10粒 | |
| | | クミンシード 小さじ1 | |
| | | 月桂樹の葉 2枚 | |
| | | (好みで) 赤トウガラシ | 丸のまま1本 |

作り方

- ① ④の材料を鍋に入れ、一度煮立させてからさします。キャベツは外側の濃い緑色の葉としんを除いて5kg用意し、2~3ミリ巾で長さは5~20センチ（要するに適当でよい）のせん切りにする。
- ② 漬物用の器に①のキャベツの半量を入れ、手でよく押しつつめこむ。そこへ④の半量を注ぎ、さらによく押し込む。次いで残りのキャベツを入れ、④の残りをかけて押し込む。
- ③ その上へ重しをのせる。重しは、日本の漬物の時よりは軽いものを使う。目安としては、1日後に水が上がってくるのが適当な重さ。1日たっても水が上がらなかつたら重しを足す。その状態で18度位の場所に2~3日置いて発酵させる。
- ④ キャベツが黄色っぽくしんなりし、汁がすっぱく（まるやかな酸味に）なったら、発酵が進みすぎないよう重しを足し、8~10度の場所に移す。戸外に置くときは、ホコリや虫が入らないよう、ふたの上からビニールをかぶせてしぼる。この状態で6~7日目から食べごろ。重しをしっかりとして低温で保存すれば1カ月はもつ。冷蔵庫に入

れるなら、十分に煮沸消毒した広口ビンなどに入れてきちっとフタをして。

このサワークラウト、前回ご紹介したピゴスの材料、と覚えておいでの方もいらっしゃるでしょうが、このまま食べてもおいしいものです。ソーセージ料理のつけ合わせにはよく合います。汁にもビタミンCが多いので、いっしょに食べてもよし、汁だけをスープに入れて微妙な酸味づけに利用することもできます。

ポーランドでは、キャベツを漬ける頃になるとキャベツ刻み器をかついだ刻み屋さん(?)が各家庭をまわるんです。かんなを巨大にしたようなその刻み器の上でキャベツを往復させると、みるまにせん切りキャベツの出来上り。見ていても楽しい光景でした。似たような刻み器がドイツにもあるのを先日のテレビ番組で紹介していたそうですね。

漬ける時の注意ですが、容器が小さすぎると水が上がってあふれますから、キャベツを全部入れても7分目くらいでおさまるような器を使って下さい。



【2頁より続く】

11月15日 ジュネーブで開催中のILO理事会は、ポーランド政府を批判するポーランド問題特別報告書を審議、多数決で同報告に留意することを可決。

11月16日 ポーランド検事総長はKOPPの活動が禁止されたと語る。スウェーデンのバルメ首相、「連帯」在外調整局代表のJ・ミレフスキらと会談、「連帯」問題は社会主義国際会議で取り上げられるべきだと語る。西独外務省、ゲンシャー外相が11月21日からポーランド訪問の予定と発表。ヤルゼルスキ首相、ホーネッカー議長との「友好的な」会談のために東独を訪問。実際はポビエウシコ事件後のポーランド情勢が中心的テーマだったとみられる。

11月17日 ポーランド、ILO脱退を正式通告。

11月19日 「連帯」地下指導部TKKが声明を発表、「ポビエウシコ事件は例外でない。当局は直接の殺害犯に全ての罪を着せてテロ・システムを隠蔽しようとしている」とし、またTKKメンバーのE・シュミエイコが個人的理由（病妻の看病）で地下活動を中止することを明らかにする。グダンスクのヤンコフスキ神父は、「殺す」という内容のものも含めこの半年に25通の脅迫状を受け取ったと西側記者に語る。

11月20日 クラクフのKOPP（正式には人権を守り暴力の行使に反対する市民運動）は、KOPP活動禁止は違法であり、脅されても活動はやめないと語る。16～19日に西独ハンブルク港に停泊したポーランド客船ステファン・パトリー号の乗客中192人が船に戻らず約100人は西側への脱退を希望。「連帯」在外調整局はポーランドのILO脱退を批判する声明を発表。

11月21日 西独外務省、ゲンシャー外相のポーランド訪問の延期を発表。反対派支持で知られるマウコフスキ、ノヴァク両神父は、「殺す」という脅迫状や電話を何度も受け取ったと語る。西独当局は11月16日にトラウフェミュンデ港でポーランド船ロガリン号の乗客

93人が船に戻らなかったと明かす。週2回グダンスクとトラウフェミュンデを往復するロガリン号からは以後も亡命者が相次ぎ、ステファン・パトリー号からのも含めて11月末までに計443人が西独に居残った。ヴァウブジフにもKOPP設立さる。〔編：高橋初子〕

【お詫び】 ポーランド日誌6月15日～23日分が脱落してしまいました。お詫びし、ここに掲載します。

6月15日 ブルガリアの党紙、ポーランドの17日の地方選挙は同国の安定度を占うものとなると報じる。

6月16日 グレンプ枢機卿、ラドムで説教、全政治団の早期釈放を求める。

6月17日 全土で「連帯」時代以降はじめての地方選挙が実施される。公式推計投票率は75%以上と発表される。ウルバン政府スポークスマンによればノヴァクタで1000人以上の選挙反対デモがあったほか投票は順調に行われたという。この日グダンスクでB・リスの釈放を求めるミサにワレサ委員長ら数千人が参加。

6月18日 党紙『トリブナ・ルド』、「ボイコット呼びかけはボイコットされた」と選挙の成功を強調。

6月19日 ウルバンによれば、選挙の最終投票率は75%弱で、50%を切った85選挙区で再投票が行われる。聖職者の投票率は38%にとどまったという。

6月20日 「連帯」ワルシャワ地方委員会、同市の投票率は57.4%（政府発表は71%）と発表。

6月21日 「連帯」暫定調整委員会（TKK）、地方議会選挙結果について声明を発表、「ボイコットは100万人以上が参加し、大成功」（本誌8/9月号）。

6月22日 国際自由労連（ICFTU）、ポーランド問題に関し報告書を発表、過去2年間に50人以上が組合活動のため死亡、と伝える。

6月23日 ニカラグアのダニエル・オルテガ議長が3日間の予定でポーランド訪問。〔編：水谷 駿〕

編集後記

☆新年合併号をお届けします。この1年間も会員、読者の皆様に大変お世話になりました。ポーランド資料センターの活動は実質4年目に入りますが、いつものことながら、よくぞここまで、というのが実感です。本質的にはポーランド労働者階級の闘いの普遍性とその深さのゆえであり、また会員・読者の皆様のご協力、ご援助の結果と考えます。

☆外国旅行に出たポーランド人が西ドイツで何百人と亡命するといふことが新聞で報じられました。

「ポビエウシコ事件で故郷への未練が吹き飛んだ」とほとんどの人が語った（『読売』12月1日付朝刊）ということ、事件の影響の深刻さを物語っています。しかし同時に、失業者があふれる西側の世界での彼らの今後の生活の困難さを思わずにはいられません。政府による情報統制がかえって西側世界に対する幻想を育てているのではないかと思います。

☆次号から1年間の予定でポーランド現代史の基本を平易に概説する「ポーランド現代史断章」（仮題）を連載の予定です。ご期待下さい。（み）



肉屋はカラッポ、隣の「警察」と書かれた
ウィンドーには警察がずらり。

ポーランド月報一九八五年二月号(巻34/35号)
一九八五年二月五日発行(毎月一回五日発行)
一九八四年一月十日第三種郵便物認可

'84年秋期 マヤコフスキー学院

ロシア語

コース	開講	曜日	講師
文芸・読物 基礎コース	10/29	月	谷 垣 志 子 桑 野 隆
中級読物 コース	10/30	火	坂 本 博 春 浦 雅
ドストエ フスキー	11/2	金	江 川 卓 良 鴻 英
プーシキン	10/29	月	水 野 忠 夫 長 繩 光

ポーランド語

コース	開講	曜日	講師
会話コース	10/30	火	米川ブランカ
初 級	11/2	金	進 藤 照 光
中 級	11/2	金	小 原 雅 俊 石 井 哲 上 朗
作品講読	11/1	木	上 藤 幸 雄 武 井 摩 利 藤 崎 誠

- 授業開始/10月29日～11月2日 ●期間/6ヵ月
- 時間/PM 6:30～9:00(会話コースのみ6:30～8:30)
- 授業料/入学申込金5,000円(ロシア語25,000 ポーランド語30,000円(会話コースのみ40,000円))
- 問合せ/中野区東中野1-41-5 TEL 362-8772 マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

定価500円・年間定期購読料4600円(送料共)